まじこい！～『闇殺し』の少年の物語～

佐久紗府斉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
まじこい！～『闇殺し』の少年の物語～

【Ｎコード】
Ｎ６７０３Ｘ

【作者名】
佐久紗府斉

【あらすじ】
ありとあらゆる暗殺術を極めた歴代最高の暗殺者の少年がいた。
でも・・「違う！俺は暗殺なんかしたくない！！」少年の叫びは閉ざされた道を破ることが出来るのか！・・・

簡単に言うとチート主人公がまじこいの世界で猛威を振るう（汗）物語です。
まじこいのキャラですが、どちらかと言うといったんばらして新しい小説風にしたい

と思っているので全てがカオスの極みです。文才も無いので・・・・
「こんなキャラじゃない」と思った人はお引取り願います・・・

プロローグ～少年は暗殺のエキスパート！？～（前書き）

ども、作者です。大して
原作を知りもしないのにやらかしてしまいました・・・
ッ更新はもう一つがメインですので遅めになると思います。
ではまずはプロローグから、どうぞ～（ｎ‘∀‘）η

プロローグ～少年は暗殺のエキスパート！？～

ダアン！！　『バスッ！！』

ある男が頭をぶち抜かれ、大量の血を撒き散らしながら床に倒れ伏した。
俺はそれを見ている。・・・・

自身が持っているスナイパーライフルのスコープから。

今俺がいるところは雑居ビルの屋上。標的のアジトから約五キロほど離れた高いビルだ。
本来ならそんな距離から狙撃をしても到底当たらない距離だ。
しかし俺はそれをいつものことのように難なくこなす。
他人が今の俺を見れば絶対びびるだろう。今の俺は完全な暗殺者モード。
目は鷹のようでとても表情はとても冷たい。

「はあ・・・・」

暗殺者モードから標準モードに『切り替え』、一息吐く。
俺の名前は「空裂（くうざき）　零斗（れいと）」・・・・・・変な名前だろ？・・・・・
まあ今更変えようとも思わないが。

『ウラ』の業界に関わる者ならば知らない奴はいないだろうとまで言われてる。
・・・らしい。

自分で言うのもなんだが若干十六歳にして狙撃・接近・『気』の総量、使い方等々・・
全ての面で『殺し』の頂点に上り詰めた。
ナンバーワンだよナンバーワン。・・・・はあ（；一д一）＝３・・・・また溜息が出る。

今回依頼されたのは政府の重鎮・・・・ではなく。とあるデカイ麻薬密輸組織の
リーダーを「やれ」と言われた。

依頼者はなんと・・・警視庁の上層部だぜ？・・・・黒いな警察も・・・・・・（汗）

たまにこんな風に警察とかからも普通に依頼が来る。
・・・いくら捕まえ難いっつってもさあ・・・いいの？・・・

「・・・でも今はこうするしかないんだ。・・・標的の死亡を確認。任務終了（ミッションコンプリート）だ。」

一瞬で俺の愛銃『Ｌ９６　スナイパーライフル（通称Ｌクロ）零斗フルカスタム』を
バラし、でかいアタッシュケースに入れてごつい鍵をかける。
指紋、ＤＮＡ情報を全て残さず『消し』、俺はビルを後にする。

夜の街を俺は歩いてうちに帰る・・・捕まる心配なんかねえ。五キロ先から撃ったなんて
誰も気づかんし依頼者は警察側。捕まる要素ねえじゃん。

・・・・ほんとは殺しなんかやりたくない。

俺だって高校生だ。友達と毎日馬鹿騒ぎしたい。恋だってしたい。
今俺は川神氏の川上学園に通っている。・・・いるんだが。明日・・・
いや、
今日から二年生だが。去年は一日に五件以上は殺しの依頼が来て
授業になどぜんぜん出ていない。ごく稀に出てても「空裂くん。お電話です。」と
また殺せと命令される。ちょっと『もうやめて』的なことを言ったんで
もう普通に授業出れると思うんだが・・・

空裂家は代々殺し屋稼業らしい。『全く、零斗は家の誇りじゃわい。』
とかじーさんも言ってたわ。何かいつの間にか他のやつらには
『地上最強の暗殺者』とか言われて畏れられてるし・・・他の暗殺者に避けられるって
どうなのよ・・・まあこれも運命だと思って諦め・・・無いッッ！！
殺し屋稼業からいつかは抜け出す！絶対！！・・・だってさあ・・・

違うもん！！こんなことしたくない！

「はあ・・・明日（今日）から二年生かあ・・・少しは『何か』が
変わってくれると
いいんだけどな・・・・・」

俺の呟きは誰にも聞かれること無く深夜の闇に溶けていく・・・

プロローグ～少年は暗殺のエキスパート！？～（後書き）

はい。プロローグ長いですね・・・

まあこれからもぼちぼち更新しますんで

皆さんぜひぜひ応援よろしく！お願いします！！

第一話　「新たな日常の開始？」　（前書き）

ども、作者の佐久紗です。

第一話が始まりました・・・・・が！

早速作者の『原作殺し（シナリオブレイカー）』が発動したようです・・・

二年になって初っ端から川神大戦です。ちなみに途中留学の

クリスとかは一年の時に留学イベント→そのまま二年へ・・・

と言う流れです。原作の途中参加キャラはもういると思って下さい。

まあそれではカオスな本編をどぞ～。

第一話　「新たな日常の開始？」

「へ～ここが川神学園かあ・・・・って・・・・もう一年間はこの生徒だったよ・・」

学園の入り口でそんなことを一人ごちる。や～っと来れたよここに・・・・

そこかしこで生徒達がわいわいやっていた。が、俺には友達が当然いない。
少ないんじゃない。居ないんだ・・・

「はあ・・・・もう教室・・・・Ｆクラスだったか・・・・行こ・・・・」そう言い、
校舎の中に入った。

本人は気づいてなかったがその場のほとんどが零斗を見ていた。
なぜなら・・・・零斗があまりにも異質な気迫を放っていたからだ。

漆黒の髪は艶を帯び、少し癖っ毛が立っている。そして右のこめかみは

どす黒い赤に染まっている。ちなみに地毛。顔は端正でカッコいいほうだが

話しかけづらい雰囲気をかもし出している。そして持ち物は普通の鞄と

いつでも『依頼』を受けられるよう、『Ｌクロ』の入った大きくてゴツイアタッシュケース

を持っている。制服は丈は同じだが袖などの幅がかなり広い。オーダーメイドで

ピッタリだけどゆったり、という着流しのような格好でそれがまた男女問わず

注目を集めていた。

「ほう・・・・・・」

そして、注目していたのは生徒達だけではなかった。たまたまそこに居合わせた

学園長までも、いや、学園長のほうがまじまじと零斗に見入っていたのだ。

何故か。それは零斗から微量に漏れる隠しきれていない濃密な『気』だ。

量こそあるかないかの量だが何より質が尋常ではない。まるで触れればやけどをするような
濃い、ひたすらに濃い『気』。学園長はそれに魅入られたように零斗を見つめ・・・・

「ほお・・・・ほっほっ。面白い生徒がいるようじゃのう。」そう呟くのだった。

ある意味衝撃的なデビューを果たした零斗であった・・・・

～Fクラスの教室～

「さって、と席は・・・・ここだな。」『Lクロ』のケースを床に置く。
「ズゴン!!」と音がし、少し教室に振動が響いた。そう、俺の『Lクロ』は普通のスナイパーライフルと比べて重量、大きさ、全てが規格外に出来ているのだ。

「ふう・・・っと!」席について皆が見ていることに気づき、机に伏せる。

「ははっ!やっぱり俺達は一緒だな!よろしく!!」　「「おう!!」」　「うん!」

「そうね。」　「そうだな！」

そんな声が聞こえてきた。仲いいな・・・・「あ！あたしの席はここね！！」

と、そこで隣に誰か座ってきた。「んあ？」誰だ？と顔を上げるとそこには・・・・・

赤っぽい髪の活気に満ち溢れたような少女がいた。

「あ、あたしは川神一子、よろしくね！」川神・・ああ、川神学園・・・読めたぞ。

ってかこいつどっかで・・・・・・あ。

「お前は・・・・河川敷の・・・・・・・・・」

「？？・・・・・・あ！！もしかしてたまに河川敷でボーっとしてた人！？」

「・・・・・・・・・・・・・・・」失礼な、あれはれっきとした修行だ。

心を『無』にするための、な。心が無の状態だと第六感を著しく磨くことが出来るのだ。

しかしコイツ・・・・純粋なヤツだな・・・・心が洗われるようだ。

特に俺は人間の汚い部分をずっと見てたから余計に和む・・・・・

「でさ！あなたの名前は！？」

「・・・・・・・空裂　零斗だ。」　「そう、よろしくね空裂君！」

「・・・・・・・・・・・」なんだろう、ここまで言われると黙るしかない。

ってか俺こんなに話すの苦手だっけ？　環境とは恐ろしいもんだな・・・・・

と、そこで先生が教室に入ってきた。「全員席に着け！」はいはい、着いてるよ・・・

「さて、私はこのFクラス担任の小島　梅子だ。まあ皆は歴史の授業で知っているだろう。出席を取るぞ。」

・・・・・ってゆーかさ、何で出席って必要なんだろう。空いた席見れば分かるじゃん。

あと教師がガチの鞭を持ってるってのはシュールすぎやしないか？

これがほんとの「ガチムチ」なんつってwww・・はい・・・ごめんなさい・・・・・・・

「・・・・・・・（はい！）・・・・・・・・（はい！）」だんだんと呼ばれていってる。

「空裂零斗」　「ほ～い。」・・・・・・あ。やっべ・・・・・。

『ピシッ！』と一気に教室の空気が凍った・・・・・気がした・・・・。

『ヒュビュン！！』刹那、鞭の二撃が顔に迫ってきた。

だがこの程度のスピード、俺には止まって見える！

俺はダメージを殺し、その鞭を腕に絡めて一気に奪い取った。

「・・・・すいません。つい口が滑っちゃいました。」鞭を返しながら言う。

「ッッ！！・・・・まあ分かったのならいい・・・・さて、今日は重大な報告がある。」

驚愕の色を隠せてない先生。　ん？なんだ？？

「いざこざの続いていた二年FクラスとSクラスの件だが、」

・・・ちょちょちょ！ちょっとまって！？まだ二年になってから一日もたってないよ！？

「先生、まだ進級して一日目ですけど・・・・・」誰かが言う。そう、その通りだ。

「・・・・一年の時からＳクラスとＦクラスの面子はほとんど変わっていないだろう。
まあ成績最高と最悪のクラスだからな。」

あれえ？・・・・クラスってこれ最初から成績で決まるんだったの？？

「そのとおりだ。」なんと！読まれた！・・・・・おーこわ・・・・・

「で、そのＦクラスとＳクラスのいざこざは・・・・・」ゴクリとつばを飲む一同。

一週間後、『川神大戦』にて決着をつける！！！」　！！・・・・・
で、

川神大戦って何ぞや？？

「川神大戦とは、学園全体を巻き込んだ２－Ｆと２－Ｓの合戦であり、互いのクラスの委員長を取
り押さえれば勝利となる。もちろん規定の武器かレプリカとして登録した武器は
使用可だ。外部の人間に協力を仰ぐことも出来る。」

ああ・・・・つまり戦争をやるわけね・・ＳＦ戦争か・・・いいじゃん。

人殺し以外で力を振るうのはひさしぶりだな。

「では、これで終わる。」梅子先生の話が終わり、休憩に入る。・・・と、

「く、空裂君凄いね！梅子先生から鞭を奪い取るなんて！！」何か川神が言ってきた。

なんだか興奮した面持ちだ。

「そうか。」と適当に返しておく。クラスの皆はっと・・・驚いてはいるが

俺の話しかけづらい雰囲気のせいで話しかけてこないようだ。

願ったり叶ったり・・・・・・・・・・・・じゃねーよっ！

無意識に意識が孤独を選んでいた・・・・。気をつけねーとな・・・・。

～side一子～

私の隣の席は今までに何回か見たことのある人だった。でも面識は無いに等しいけど。

その人は河川敷でたまに呆けたように遠くを見ている人だった。

最初、その空裂君が隣の席に座っていたのを見た時は一瞬「うっ」とたじろいだ。

それはあまりにも近寄りがたく、「来るんじゃない」と言わんばかりの

冷たい気迫だったから。

それでも私は少しだけ勇気を出していつものように話しかけてみた。

そして、

「んあ？」と、顔を上げた空裂君の顔を見て私はとても驚いた。

やはり人を拒絶するような雰囲気。だけどその目は人とのつながりを強く望んでいるような

寂しがり屋の子供のような切ない目で。

そして、さらに驚くことが起こった。ウメ先生の出席確認で空裂君は「ほ～い。」と

間の抜けた返事をしてしまったのだ。直後にウメ先生の鞭が飛んだ。

でも、一瞬後には

鞭は空裂君の手に治まっていた。クラス全員が唖然とする。もちろん私も。

私にはウメ先生の鞭の動きすら見えなかったのに！

授業中も私は彼の横顔を眺めていた。すると、ときどき彼の表情がふいにフッ・・・と

曇る時がある事に気づいた。そのどれもが「やりきれない気持ち」や「後悔」と言うような

表情だった。

彼に何が起こったのだろう。何が起こっているのだろう。

もっと知りたい、そう思った。そして・・・・もっと仲良くなりたいと思った。

このずっと孤独に耐えてきたような瞳をしている彼を支えてあげたいと思った。

私はファミリーの皆に、いろいろな人に支えられて楽しい『今』を送っている。

だから・・・・今度は私が、この人の孤独をといてあげたい。

そう強く思った。

～side　out～

第一話　「新たな日常の開始？」　（後書き）

はい。一子にフラグ（の様な何か）が立ちました？早いですね・・・

まあこっからは長々と駄文を書く予定です。
この原作の崩壊度にあなたは着いてこれるか！？ｗｗｗｗ
次はおそらく主人公紹介的な何かになると思います。

～主人公設定～（前書き）

ども。今回は主人公設定です。

零斗君はキモイぐらいのチートにする予定です。

最強だけど孤独・・・・みたいなね？ｗｗｗ

ではどーぞ。

～主人公設定～

～主人公設定～

名前――空裂零斗（くうざき れいと）

誕生日――十一月二十五日（本人は忘れかけている。）

容姿――端正な顔立ちだがどこか近寄りづらく、人を拒んでいる雰囲気。

髪は艶のある漆黒の髪でちょっと癖毛。

髪型と顔立ちは『ガンダムＯＯ』の『刹那・Ｆ・セイエイ』を少しだけ幼くしたような感じ。

右のこめかみの一部に生まれつきの赤黒い髪が生えている。
ちなみにこの赤黒い髪は特殊なもの。詳細はストーリーが進むにつれ明らかとなる。

声は普通の高校生の声だがやはり修羅場をくぐりぬけてきているだけあって
切れると誰もがびびるような迫力に満ちた声になる。

体型――背は普通。ほっそりとしているが無駄な肉が一切無く引き締まっている。

生い立ち――家は先祖代々『殺し』を生業としていて、物心ついたときから祖父に一流の暗殺者になるよう訓練された。先祖には忍びもいたらしく、回避術などは忍術の要素があるものも教えられた。

その内容はかなり鬼畜。

両親は物心ついたときにはもう亡くなっている。が、やはり両親も裏家業の人間だったらしい。

現在、『体人暗殺術』、『狙撃、銃器』、『気の総量、使い方』、そして『状況把握、適応』、これら全てにおいて『歴代最高の殺し屋』の名を欲しいままにしている。

『暗殺者』モードに切り替えると表情が消え、戦闘力は減るが集中力や反射神経が爆増する。

『死の具現』などの二つ名も多々ある。

本人は幼いころ、「主要人物を殺すことでより大きな混乱を防ぐことが出来る。」と刷り込まれ、それを信じてきたが今、『人を殺す』ことに疑問を抱き始め、

今では廃業して普通の高校生になりたいと強く望んでいる。

・・・が、幼少期から刷り込まれたことは簡単には抜けず、

戦闘自体は割りと好み、戦闘中、ハイになってしまいそうになることもしばしば。

川神学園の二年生。一年生の時は以来を完遂するためにほとんど授業には出ていない。

制服は袖や裾の幅が広く、着流しのような感じで最大サイズのを買った後で
丈を短くし、着流しのようなゆったりとしたものになっている。

理由がいつでも依頼を受けられるようにするものだと言うことは秘密である。

自分で稼いだ報酬で既に学園のすぐ近くの高級マンションの一室を借りて
一人暮らしをしている。

実家もそう遠くは無いが実家から逃げ出すことのほうが一人暮らしの目的。
家事スキルあり。

しかし実家から自分宛の『依頼』の電話は尽きない・・・・。

～補足解説～

『Ｌクロ』――――『Ｌ９６・スナイパーライフル』の略で零斗の一番の愛用銃。

零斗専用のカスタムが施され最大射程距離が数倍に跳ね上がっている。

零斗の能力と組み合わせればほぼ無敵の銃。零斗の身長ほどもある。

いつもでかいアタッシュケースに入って、常に零斗のそばにある。

～主人公設定～（後書き）

はい、もう見るからにどチートオーラが漂ってます・・・・・

こっからひたすら原作をぶち殺して進むのでお覚悟を・・・・・

ちなみに禁書のパクリなんかがごく僅かですがあります。

ではでは～

第二話　「『表』と『裏』」（前書き）

どもども、

今回は『表』と『裏』両サイドあります。

なにげに長くなりました。ではどーぞ。

第二話　「『表』と『裏』」

～授業終了後～

「・・・・・・・・なんだこれは・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

授業が終わり、皆がぱらぱらと教室から出て行っている中、俺は配られたばかりの教科書を呆然と見ている。まあ最初の授業と言えども余った時間で少し内容はやったわけで・・・

・・・・・・・・・コレハナンダ？高校数学ってこんな鬼畜な内容だったか！？

まず数学、圧倒的に分からん。もはや揺るぎ無いほどの不可解さ。

英語、これも全く分からん。日本語もちゃんと理解して無い奴がいるのに

なんで外国語に手を出す！？もっかい鎖国してまえ！！

国語、まだいい、しかし俺の『まだいい』は常人が若干ヒくレベルである。

ゆえに決して侮ってはいけない。

これらのことから導かれた一つの答え・・・・・・それは

・・・・・・・・「俺は勉強が出来ない。（通称はがない）」

・・・・・・・なんだ？この半年の間に何があった！？俺が『仕事』に専念してた間に！　一体！　何が！　起こった！？あん！？

「・・・・・・・・・・駄目だ。（ありとあらゆる意味で）オウチニカエロウ・・・・・。」

完全に勉強面を捨て、ふらふらと教室を出ようとした時、

「ねえ、空裂君！一緒に帰ろ！？」

・・・・・やけにテンションの高い声がかけられた。

ああ、川神か。

「別に構わないが・・・・・・・。」　コイツは珍しいな。何で絡んでくる？

・・・いや、むしろ嬉しいけど。スゲー嬉しいけど。

「ほんとに！？じゃあ帰ろう！！」

テンションＭＡＸになってやがる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

と、何か後ろから妙な殺気を感じた。微量だが。極々微量だが。

「何でそんな奴と一緒に帰るんだ一子？」

俺を睨んでいた内の一人が川神を説得しようとしている。
まあ俺ははたから見れば『何考えてるか分からない奴』だろーからな・・・・

・・・・誰これ・・・・確か・・・

「直江・・・大和・・だったか・・・」

明らかに頭脳派なやつだな。彼のお仲間と思われる数人と一緒にこっちを警戒している。

「ああ。お前は空裂零斗って言ってたな。」

明らかに不審者を見る目だ。・・・・おい、流石に傷つくぞ?

「なによ、いーじゃない別に、隣同士なんだし。」
と川神が言うと

「そんなわけの分からねえ奴と帰るよりファミリーで帰ろうぜ。」
直江も言い返す。

「ファミリー?・・・・・」

「まあ昔からの遊び仲間のようなもんよ。」一子が説明してきた。
なんだよ・・・・・

『ファミリー』って聞いて真っ先に出てきたのがマフィアのヤクザで言う『〜組』
って言う方のニュアンスだった。俺ももう大概やばいな・・・・・

「隣同士、気まずいままじゃ居心地悪いし、今日は空裂君と帰るわ。いいでしょ？
空裂君？」

「あ・・・・ああ。」断る理由も無いのでとりあえず一緒に校舎を出て、道を歩く。
ちなみに教室を出る時に

「あんなわけ分かんねえ奴と一子を近づけて大丈夫か？」とか
「ああ、まあどうせ一子も聞きゃしねーんだしな。・・・・でもそれで一子に
なんかあったら俺は迷わずあいつをぶん殴る。」
ってな声が聞こえた。

「おお、大和、殺気が・・・・」とか奴のダチであろう筋肉男が言ってたが
俺としては「はあ？誰に向かって言ってんだァ？（笑）」って感じだ。

二人で学校から一緒に帰る。ああ、なんかこんな日常っていいなあ・・・・そんなことを考えながら歩いていた俺。しかし・・・・

（・・・・・気まずい。）
うん。メッチャ気まずい。どーしよ・・・・・・

「えっとね・・・・改めまして！川神一子だよ！明日からもよろしくね！
あ、『一子』って呼んでね！！」
なして自己紹介？・・・・こいつも案外テンパっているんだろーか。

「じゃあこっちも改めて、空裂零斗だ。『空裂』でも『零斗』でも好きに呼んでくれ。」
ただし殺しの二つ名はダメ、ゼッタイ。
なんやかんやで地味に話をする。ってか人とこうやって話すの久しぶりー（、・ω・´）。
と、その時。
「ねえ、ずっと気になってたんだけど、その超ゴツイアタッシュケースは何？」
「！！！」やべ！
「見るな触るな触れるな話を出すな。これはパンドラの箱だ。」
嘘はついてないよ？
「わ、分かったわ・・・誰にでも知られたくないことの一つや二つあるもんね・・・」
・・・俺の場合一つや二つどころじゃねーけどな・・・・
「悪い。でもこれはどーしても言えん。」
言ったらもう俺の学校生活は終わる。オワタ的な意味で。
もしバレたら誰も寄り付かなくなるだろーな。
・・隣で笑ってるこいつでさえも・・・・
「・・・零斗、どうしたの？」あ、顔に出てたか。
「い、いや、なんでもない。」慌てて答える。そこで会話は途絶え、沈黙が場を支配する。

そこで俺はずっと気になっていたことを聞いてみた。

「なあ、何であの時俺に声をかけた？俺の事はまったく知らなかったろ？」

すると、川神・・・いや、一子はクスッと笑い、

「だってさ・・・零斗・・・一人で寂しそうだったんだもん！」

「！！！」・・・驚いた。初対面だったのに・・・・・

「そんなにか？」

「うん。俗に言う『ボッチ』ってやつね。」

「・・・・・」

事実だ、事実である。俺は確かにずっと『ボッチ』だった。

でも、そのことを指摘してくれた奴はコイツが始めてだ。

俺はそのことにちょっと嬉しい気持ちになる。

と、その時。

「～～～～～～～～！～～～～～～！」　ポケットに忍ばせていたケータイが振動を伝える。「！！！」

「あ、どしたの？メール？？」川神が聞いてくる。本来ケータイや不要物は持ち込み

NOなのだがFクラスにそんなルールを守ってるやつはいない・・・だろ。

メールを開く。と、そこには・・・・・

空裂零斗に〇〇教の武装派テロリスト集団『××・×××』のリーダー、

『□□・□□□・□□』の殺害を依頼する。報酬は百十五万。

現在この川崎市に潜伏中・・・・・・・・・・・・・・

やっぱりだった。『依頼』だった。その後には標的の顔写真と現在の潜伏予想場所、

その他もろもろがびっしりと書き込んであった。依頼人は

『裏』の日本治安維持組織（裏ギルド）からだ。

一件穏やかに見えるこの国にも『裏』がある。ここなんか代表例か。

「名指しかよ・・・・・・有名なこった・・・・・・」思わず呟く。

「零斗??」不思議そうに一子が聞いてくる。

「っと!わりい。ちょっと用事が出来た。先に帰らしてくれ。」

「・・・・・・分かったわ。じゃあまた明日ね！！」
ちょっと残念そうな一子。スマン。

だが、こっからは一般人は立ち入り禁止。

『裏』での戦いだ。無論こいつに危険を負わせるなんて考えたくも無い。

こうして俺は『裏』の世界へと今日も駆けてゆく。

～一子ｓｉｄｅ～

今日は思い切って一緒に帰ろうと零斗を誘ってみた。ファミリーの邪魔が入ったけれど、

零斗は『構わない』と言ってくれた。なんだか妙に嬉しかった。

帰る途中には、結構話が出来た。思ったより零斗はよく喋った。

アタッシュケースに触ろうとしたら怒られちゃったけど・・・・

そしてさりげなく自己紹介をして、な、名前を呼んで欲しいと言ってみた／／／

驚くほどあっさり承諾してくれた。その後もいろいろと喋りながら帰っていたが

ふいに零斗のケータイがなった。そして――――

――――零斗の表情が変わった。表情の無い、冷たい顔に。

「っと！わりい。ちょっと用事が出来た。先に帰らしてくれ。」零斗が突然言ってきた。

・・・・表情を消した顔のままで。

「・・・・・・分かったわ。じゃあまた明日ね！！」

なんとかそういったものの、私の心は心配でいっぱいだった。

零斗の背中が薄暗闇の中に消えていく。私はそれを、言いようの無い不安感を

抱きながら見つめていたのだった・・・

～side　out～

俺は今、標的の位置（ホテル）から五キロの位置に『Ｌクロ』を構えている。

標的の場所はメールに書いてあった位置と自分の推理で割り出した。

窓際にいる標的そっくり、と言うか本人の頭に照準（レティクル）をあわせ、一気にトリガーを引く。（バシュン！！）風によるブレも全て計算しつくされた弾丸は

一寸の狂いも無く、標的の頭を射抜いた。

「標的の死亡を確認。ミッションコンプリート。」そう呟き、『いつものように』

Lクロを収め、後始末をする――――――――

――――――――まただ。また殺した。いつまで殺ればいいんだ。

一刻も早くこんなことはやめないとな。

いったん家に帰ったとき、電話でじいちゃんから「もう『裏ギルド』以外の依頼は受けるな。」と言われて少しは前進したか、と感じた。

『裏ギルド』からの依頼は基本治安維持目的だからな。

殺るのは必然的に死刑級かつ国際級の犯罪者に絞られるが・・・・

でもまだだ。俺は『人殺し』をしたくないんだ。

絶対変えてやる、俺の人生を。

そう呟き、俺は陣取っていた廃ビルを後にし、

一人真夜中の闇に溶けていった・・・・

第二話　「『表』と『裏』」（後書き）

どうでしたか？零斗は少しは人を殺さなくて良くなったようですね。

次回からは川神大戦かな～とか思ってます。

時間軸わやですが・・・・ではでは～。

第三話　「開戦！！」（前書き）

ども！始まりました川神大戦！！

はっきりいって主人公がどこまでチートかを

見せる目的もありますので頑張って書きたいです！

ではどうぞ！！

第三話　「開戦！！」

～一週間後、いや六日後、丹沢山地～

さて、ついにこの日が来た。
ちなみにこの六日はほとんど登校しなかった。何か『裏ギルド』とかの
登録に時間がかかった。
どうやらあの日の依頼はランクを決めるテスト的なもんだったらしい。
人名使って技量テストたあ・・・ったく反吐が出るぜ。

結果は『ランクＥＸ』。

・・・そりゃ通常の射程の五倍の距離から撃ち抜けりゃ当然ってもんか。
ってか『ＥＸ』は俺一人しかいないらしい。
裏ギルドの事務所（川神支部。場所は教えん。）に行ったら
そりゃあ喜ばれた（そして恐れられた）・・・・ぜんぜん嬉しくねえよッ！！

でもこれで暗殺依頼は相当少なくなるな。ランク相当の依頼が来るようだから
依頼件数は激減間違いなし！また一歩前進したな！！

・・・ということで今俺はかなり気分がいい。

「さて、ついにこの日が来た。この川神大戦で決着がつく。諸悪の権化であるSクラスを今こそ打倒し、Fクラスの力を見せてやれ!!」

自陣のやぐらの上で直江大和・・・・直江でいーや・・・が演説している。

「「「「「「オオオオオオオオオオオーーーー!!!!」」」」」」
「お〜〜〜〜・・・・・」

見事な演説と士気だがクラスのいざこざ程度で『諸悪の権化』なんて言葉を使うか?
普通。

そして気の無い返事をする俺。ってかこのクラスの士気ヤバっ!
すげーよ。一部目が血走ってるやついるぞ・・・・・ダイジョウブ?

ところで今の俺はクラスから明らかに浮いていた。何故かって??

・・・・・体操服忘れたんだよおおお!!

や っ ち ま っ た 。

まあこのゆったり制服の方がはっきり言って動きやすいが。
先生に頼んだらあっさり入れたけど浮きようが半端じゃねえぞ・・・

・

ちなみに『気の無い返事をする俺。』とか言いつつ実際この戦いをすげえ楽しみにしてた俺がいた・・・・・・いや、いる。

だってさ！正面切って闘えるんだぜ！？
いっつも遠くとか死角から一撃必殺で殺ってたからさあ！！
狙撃とかけっこう空しいし！

しかもレプリカなら武器（暗具）ＯＫと来たもんだ。最高じゃん。
俺の愛用の武器で『接近して』、『殺さずに』闘えるんだ！・・・・
ここ重要。

え？愛用の武器が何かって？

Ｌクロ？違うわ。つまらんだろが。

拳銃？承認されんわｗｗｗ

刀？違う。小太刀も違う。だいたい小太刀とか刀は暗具じゃねえ。

まあ使うときに分かるさｗｗｗ・・・そこ！『えーーー』とか言うな！！

テンションがおかしい。人を殺すのは大嫌いだが純粋な戦闘は結構、いや、大好きです。
これが『刷り込み効果』ってやつですか？・・・・

俺の前で隊が編成されていく。っと！希望を聞いてもらえるのか。

「おい。俺は一人で行かせてくれ。」たっての希望を言ってみる。

「はあ！？死ぬだけだぞ！」　「何言ってんの零斗！いっしょに行こうよ！」

直江と一子が即座に反論してくる。

・・・・・希望聞くって言ったじゃん！ガ──（ °Д ° ; ）──ン！！

・・・・あ、聞くだけか？そうゆうオチなのか！？

「わあーったよ・・・・じゃあ先陣で、いや先々陣で。」

「ねーよそんなもん！」・・・はあい・・・・・。（ ; ´ ・ ω ・ ` ）

すごすごと所定の陣形を取る。俺は先陣だ・・・ゆっくり行こ。疲れるし。

その時。「ダアン！バン！バン！！」ゲーム開始の信号弾が空に上がった。

ゲーム開始だ。

「「「「「うおおおおおお！！」」」」」・・・・・え？

「ほら！零斗もいくよ！」・・・・・待て待て待て待て待て待て待て待て！

え、こいつら馬鹿なの！？

「アホか。今から走ってったら交戦するときにはもうへとへとだっつーの。

ぶつかるまでは最小の力でいく。ぶつかった時に本気を出せるよーにな。」

「「「「「た、確かに！！」」」」」

一子に言ったはずの言葉に先陣の全員が（ 。Д 。；）みたいな顔で固まった。

「・・・・さすが零斗ね！」　「見直したぜ！」　「今まで変な目で見てスマンかった！」

そして何故か好感度が上がった・・・・・・・・おい。大丈夫なんかお前ら・・・・

後最後のやつ、どうゆうことだ？ああん！？

「はあ・・・・・じゃあ競歩ぐらいのペースで行こうぜ。」

「「「「「応ッ！！」」」」」

こうして俺は何故か皆の好感度と士気を上げ、敵陣に向かうのだった。

～しばらくして～

「見えたぞ！！突っ込め！！」　先頭で進んでいた一人が声を上げた。

見ればかなりの大部隊がこっちに歩いて、いや、走ってきていた。

こちらも一気に走り出し、あっという間に交戦状態となった。

「じゃあさ、一緒に行こうよ零斗！！」一子が話しかけてきた。

「おう、でも俺は走らない。手柄に焦ってる奴はたいてい死亡フラグを立てるからな。」

「・・・・・・・・分かったわ。一緒に歩いていく。でも・・・零斗・・・・」

ん？何だ？

「死なないでね。」

一子に見事に言い放たれた。

・・・・ちょ！それってもろに死亡フラグじゃね！？

「・・・・さあな。」と、口では言っておく。

それに・・・これは所詮『ゲーム』だ。実際に命をやり取りをしているわけじゃない。
明らかに緊張感が無い。『裏』だったらあっという間に全滅だな・・・
とか思っている間に俺の所にSクラスの一人が木刀を振りかぶり、迫ってきた。

・・・・・甘い。

『ドスン！！』

木刀が振り下ろされる前に拳を鳩尾にねじ込む。ノーモーションで。
基本暗殺用の体術は一撃必殺。ノーモーションからの一撃で決める。

「さーて、かかってくる奴は誰だ～？」

アブナイ笑みを浮かべながら混沌の戦場の中をゆっくりと、散歩で

もするかのように
相手の本陣へと向かう。

『はあっ！』『せえい！！』『おりゃあっ！』

三人の生徒が三方向から突っ込んでくる。・・・が、俺から一定の範囲内に入った瞬間
『ドサア・・・』と倒れていく。

「はあああああっ！！」 声が聞こえたのでふと見ると一子が薙刀で一気に二、三人を
吹き飛ばしている。・・・・ｗｗｗ・・そんな大振りじゃもたねーぞォ！！

二十分ぐらい経っただろうか。徐々にこちらが押されてきた。
こちらの士気は十分だがあちらは数が半端ではない。
次から次へと増援がくる・・・・ちょっと多すぎね？
クラスメイトを見ると、数は半分ほどになり、誰もが疲れきっている。
・・・・限界か。

「はあ・・・はあ・・・数が多すぎるっ！！これじゃいつかやられちゃうよお～。」
一子も肩で息をしているな。

「皆、一旦撤退しろ！！」　Ｆクラスの『源　忠勝』だったな・・・が叫ぶと同時に
皆蜘蛛の子を散らすように撤退していく。いい選択だ。

・・・・さーて、本番はこっからだな（ニヤッ）
ポケットに手を突っ込み、迫ってくる大舞台の前に立つ。
「！零斗！撤退よ！！」一子が言ってくる。が、

・・・はあ？こっから楽しくなるんだろーが！

「お前は撤退してろ。俺は進む。」「む、無理よ！！一人で！」

「無理じゃない。」即座に言い放つ、と一子は
「む～～～～～！！だったら私もいくわよ～！！」
ちょっと迷った後でこっちについてくることを選んだ。
そんな一子を見て、理由は分からないがなんだかちょっと嬉しくな

った。

「ふふ・・・・・だったらお前の背中ぐらいは守ってやんよ。」
俺が言うと

「！！／／／零斗・・・零斗が笑ったぁ！」　はい？

気づいてなかったがいつの間にか俺は微笑んでいたらしい・・・・
っと！

「さて、話はこんぐらいにしよう。どこまでいけるかやってみよう
じゃんか。」

「うんっ！」満面の・・・なぜかすごくいい笑顔で頷く一子と

「さーて、いくぜえー！（黒笑）」またなかなかにアブナイ笑みを
浮かべる俺。

目の前には大部隊、対してこっちは二人、はたから見れば絶望的な
闘いが
幕を開けた。

～一子ｓｉｄｅ～

今日の零斗はなんだかとても機嫌がよさそうだった。
ぜんぜん学校に来なかったから心配してたけど別に体調も悪いわけではなさそう。
体操服を忘れてなお機嫌がよさそう。なにかいいことがあったのかな？
隊列を組む時、思い切って「一緒に行こうよ！」と言ってみた。・・・・と
零斗に（ °Д° ；）こんな顔をされた。なによ、そんなに私と行きたくないの！？

ちょっとショックだった。そして大戦は始まり、先陣の零斗の提案・・・と言うか指示で
私達は歩いて進軍した。

そして乱戦状態になり私は思いっきり力を振るった。

薙刀を振り回しながらふと零斗の方を見ると、敵の一人がちょうど木刀を零斗に
振り下ろそうとしていた。零斗は手足の力を抜き、だらりとした格好で歩いていた。

「ッ！！！」声すら上がらない、そんな手遅れともいえるタイミング。

でも、気づいた時には相手の鳩尾に零斗の拳がめり込んでいた。

・・・・・見えなかった。特に構えもモーションも無いのに食らった相手は
一瞬で意識を刈り取られたようだった。

・・・・・強い。

しかもたぶん、ううん。確実に零斗は手を抜いている。完全に未知数の技量。

・・・・・知りたい。零斗の全力を知りたい。そう思った。

しばらくすると、こっちが数のせいでかなり押されてきた。
自分もかなり疲れた。

「皆、一旦撤退しろ！！」　ゲンさんが叫ぶ。それを聞き、皆がわらわらと撤退していく。

そんな中、零斗だけは一歩も退いていなかった。

「零斗！撤退よ！！」そう叫ぶ。でも、

「お前は撤退してろ。俺は進む。」零斗は全く動じなかった。だけど！

「む、無理よ！！一人で！」一人で行ったらいくら実力があっても戦死は免れない。

姉さま級の実力者で無い限り。零斗が死ぬのは絶対にやだ。なのに、なのに。

「無理じゃない。」零斗は即座に言い放ってくる。もう、全く聞かないんだから！！

「む～～～～～！！だったら私もいくわよ～！！」

迷った挙句零斗についてくることにした。

すると・・・・

「ふふ・・・・・だったらお前の背中ぐらいは守ってやんよ。」

零斗が笑った。とても優しい微笑を浮かべている。零斗のこんな顔、始めて見た・・・・

他人の前では絶対に出さなかった笑顔、それを自分に向けてくれたと思うと、

とても嬉しくなった。と同時に零斗の「守ってやんよ」というセリフにちょっと

どきどきしてしまった。

「さて、話はこんぐらいにしよう。どこまでいけるかやってみようじゃんか。」

自信満々に言う零斗。はっきりいって無謀だ。でも、

・・・零斗と一緒なら出来るかもしれない。

そう感じ、私は・・・・

「うんっ！」と満面の笑みを返すのだった。

第三話　「開戦！！」（後書き）

どうでしたか？まだまだ零斗君は本気を出してません。

武器も何か分かりませんし・・・

・・・次回にご期待を！・・・・ねむ・・・・

でふぁでふぁ・・・・ＺＺＺ・・・

第四話「大戦中盤――打ち解ける心」（前書き）

どもども！作者です。

今回は零斗君がクラスの輪に入る話です。

ちょっと不自然なとこもありますがそこは暖かい目で見ていただきたい・・・・・（m―　―m）

ではどーぞ。

第四話「大戦中盤――打ち解ける心」

「はああっ！！」

「ふっ！！」

俺達は今、敵の増援部隊のど真ん中に居た。三百六十度敵である。
否、的である。

ふはははは！！武道を少しかじった位で俺にかなうと思うてか！！

「おい一子、そろそろ疲れたんじゃねーか？」

「・・・・・まだまだ！はあああ！！」　一子が叫ぶ。
・・・・それじゃ疲れてんのが丸分かりだぜ？・・・・

ちなみに俺は息すら上がっていない。暗殺術ってのはいかに最小の力で効率よく
ダメージを与えられるか、だからな。
実際今までの敵は全て首か鳩尾にキめてますから。

そうこうしているうちにあたりの敵は皆、屍（偽）へと変貌した。
おお、一子も頑張ったな。

ちなみに現在の位置は半分よりちょこっと相手陣よりだと思う。

「さってと。休憩だな。」

「は～・・・めちゃくちゃハードねこれ・・・・・」　一子がぼやく。

「いいのか？今ならいつでも退けるぜ？」　ちょっとからかってみる。

「・・・・やだ。私もどこまでやれるか試したいし。」

「よし、その意気だ。」・・・・・お、次が来たか。

向こうからＳクラスの新手が来た。数は・・・まあまあ居るな・・・・・・・っと、今回は武将（的な奴）が居るんだな。

相手軍が近づいて来た。・・・・運ばせてないで歩けよ・・・・・戦争だぞ？？

しかもなんだあの、んーーー、派手な浴衣的なのは・・・・・ここは祭りかっつーの。

・・・・舐めてんの？え？舐めてんの？

「・・・ん？・・・・敵・・・・ふん！二名だけか。構わん！蹴散らして進め！！」

「で、ですが心様・・・・奴らはここまで二人だけで進んできたようですが・・・・」

「構わぬ。我が負けるなど絶対にありえぬのじゃ！！」

「こっからは行かせないんだからっ！」　一子が薙刀を構える。

「ふん、庶民ごときが我に勝てるとでも思うているのか！」

やな奴だな心様とやら・・・・

「勝てる！いっぱい努力してきたもん！（それに・・零斗も居るし・・・）」
??最後の方が急に小さくなったな・・・

「は、何を言い出すかと思えば。努力?そんなものしたところで高貴なる我に
勝てるはずが無かろう！！」　明らかに人を見下した表情。それを見て俺は・・・

「・・・・・・・・・・・・」

（プツッ！）とまではいかないが半切れ状態に進化した。
「なっ！だったら見せてやろうじゃない！」　一子が走り出そうとしたが、

「待ってくれ。ここは俺一人にやらせてくれないか。」　それを片手で一子を制する。

「！！だって！」　「いいから。遠くで見てろ。」　そう言い残し、俺は
両の手をポッケに突っ込んだまま敵の軍勢の中に歩みを進めた。

「ふん。一人で来てなんになるのじゃ（笑）、かかれい！！」

一気に全軍で襲い掛かって来る。――――――――――――だが。

「バタバタバタッ！」　最初に襲い掛かってきた五人は一瞬の後に
全員地に倒れ伏した。　心様があっけに取られてやがる・・・あ、
一子もだった・・

全員の首筋にはレプリカの刺し傷（まあすぐに無くなるだろう）。
・・・そう。ここに来て俺は自分の武器を使った。

ポッケから抜かれた俺の右手にはキラリと光るものが。

それは・・・全長十五センチかそこらの『矢』だった。

・・・・・・・・・『打ち根』。投げずに使う刺突用の矢で
『世界最小の短槍』と呼ばれる代物。そして俺の愛用の武器。

切れないが刺し味は度を越えて鋭く、最小の動作で敵を死に至らし
める暗具である。
・・・・これはレプリカだが。

そのままゆっくり心様の前まで歩いてゆく。俺の通った道のりをな
ぞるかのように
バタバタと人が倒れていく。

すれ違い様に一刺。返す刀（？）で反対の敵を一刺。

戦力の半分ほどを殺った時にはもう半分の生徒も『恐怖』から完全に沈黙していた。

とうとう静まり返る戦場。

その中を俺はゆっくりと、『心様』の元へと歩いてゆく。

「ひいいい・・・・来るな！」　顔を真っ青にしておびえる心様。そしてそんな心様に俺は告げた。

「おい・・・・死にたくなければ一子に謝れ。」

「！！～～～～～～（ギンッ！！）ごめんなさいごめんなさいごめんなさい～～～～！！」
心外そうにしていたので一睨み聞かせてやると素直に謝った。最初からそうしろ。

「そしたらさっさと行けよ・・・・・・行けよッ！！」　叫ぶ。

「ヒッ！・・・・撤退じゃ！急がんか！！」　怒鳴り散らして心様は退場して言った。

「・・・・・・・」　俺が誰も居なくなった戦場で沈黙していると、

「・・・・・・あ、ありがとね零斗。こんな私のために怒ってくれて・・・・」

一子が何やらごにょごにょと言ってきた。

「まあ気にすんな。」そう軽く言ってから、

「それに・・・俺も努力してんだ。」　と続ける。

「！！・・・・・そうだよね。努力を否定されるのは嫌だもんね・・・・」

「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」二人して黙ってしまう。

いかん、気まずいぞ・・・

と、・・・・・・？？？おかしいな・・・・前方に敵の本陣が見えるぞ？？・・・・

「・・・・疲れてんのかな、俺・・・・・」　そう呟くと、

「違うわよ！！」　一子、ナイス突っ込み。分かってますって。

「チッ・・・まさかここまで来てたのか。・・・・！弓兵まで揃えてやがる。」

ってか・・・・・届くぞこりゃ・・・・・

「弓兵、前へ！！」

そう思っていると弓兵を仕切っている軍人（？）的な奴が指示を出した。

刹那、空に一斉に放たれた矢がこちらに飛んできた。正直二人に対してこの矢の量は
無いと思います。ハイ。

「でえやあああああああ！！」一子が薙刀で矢を弾き飛ばす。俺はというと・・・

「よっ！ほっほっ！！っとお！」

矢と矢の隙間に入り、足さばきで矢をかわしていた。

基本俺は『受け止める』ってことをしないからな。その方が速いし。
・・・だけどこのままじゃジリ貧になっちまうな・・・・そう思っていると、

相手の弓兵が急に全員倒れた。矢の飛んできた方向を見ると・・・・
岩の上に一人の少女が立っていた。・・・椎名京だったな。
「京！！」　一子が叫ぶ。

「っ！！狙撃主を狙え！」　矢が椎名に向かって放たれるが無論そんな距離では
届きやしない。

「そんな弓じゃ届かないよ？」

そういい、椎名は弓を放つ。弓は着弾（？）すると同時に爆風で残った弓兵を一掃した。

・・・・・・あれ？矢で爆風っておかしくね？？

「私のは狙撃用の弓だから何でも射抜くよ！・・・・・いつかきっと大和のハートも・・・・（照）」

・・・・ツッコミどころが多すぎる・・・とりあえず一つ言っておくと

それは『射抜く』って言いません！見ろ！黒煙上がってんぞ！？

「京だけじゃねえぞぉ！！」

声がかけられた。振り返ると・・・大量の自軍がこっちに押し寄せてきていた。

・・・・そーだ。ほとんど戦力使ってねーじゃん。

「いやあ・・・・まさか生きてたなんてなあ。ゲンさんが『あの二

人は逃げ遅れた』
なんていってたからてっきり戦死したと思ってたんだが・・・」
『風間翔一』がそんなことを言ってきた。

・・・失礼な。

「ってかここまでの奴ら全部お前ら二人でやったんだろ？進む時とか戦死者だらけで
焦ったぜ・・・・」　筋肉男・・・『島津岳人』も声をかけてきた。

「おう、戻るのめんどかった。」　何気なくそういうと

「「「「「「「「「「「「「えええええええええええええ！！！！！（。д。；」」」」」」」」」」」」」

何かメッチャ驚かれた。

「お、お前・・むちゃくちゃ強かったんだな・・・・・見直したぜ！」

「サンキュー。」

「ははははっ！！お前面白い奴だなーー！！」　「あざッス」・・・・・

「出陣したら戦死をもいとわぬ精神・・・まさに武士だな・・・」

「いや。戻るのがたいぎかったんだって・・・」

『クリスティアーネ』や風間、筋肉男・・・否、島津達や
Fクラスの奴らが次々に労ってくれる。そして・・・・・

「全く、こっちの戦略をぶち壊しやがって・・・」　直江もなんか
言ってます。

「・・・・・まあ結果オーライって事で・・・・（汗）」
反省はしてない。

「そうだな・・・・お前が居なかったらこの戦、勝てなかったかも
しれないからな・・」
そう言い、直江は続けて、

「・・・いままで変な目で見てすまなかった、許してくれ。後、
これからはよろしくな！」

そういい、手を差し出してきた。周りを見ると、皆頷いたり口笛を

鳴らしたり
拍手をしたりしている。・・・・・ここの全員を代表してって事か。
・・・・やった！やったぜ！！これで晴れてクラスの一員って事だな！？

「・・・おうッ！！」　そういい、俺は直江の手をがっちりとつかんだ。

「オオオオオオオオオオ！！！！！」　歓声が上がる。それは・・・・・・

俺がこのクラスに『認められた』瞬間だった。

第四話「大戦中盤――打ち解ける心」（後書き）

はい、キモイぐらいのチートですね・・・・

でも次回ではさらに化け物化すると思いますので・・・

口調とかが不自然に思える人が居たらごめんなさい・・・

良かったですね零斗君！残るは殺しをやめるだけです！！

・・・たぶん・・

あ、『打ち根』は禁書をパクってます・・・

分かるかな・・・

では次回もお楽しみに～～

第五話「戦争終結と『延長戦』の開始」（前書き）

こんばんわ、作者です。

今回で川神大戦は終結ですが、実は延長戦が次回に残ってます。

零斗君が化け物になるのは次回です

まあではどーぞ。

第五話「戦争終結と『延長戦』の開始」

「っしゃあ！いくぜえええ！！」　風間の一声で自軍が敵陣になだれ込む。

これは勝ったぞ！・・・まあほとんど戦力使って無かったしな。

「ふふ、これにて大戦しゅ～りょ～、だな。」

いま、俺は最高に気分が良かった。少し前には完全に諦めていた人との『繋がり』。

・・・ついに勝ち取れた。でも・・・俺の『職業』を知ったらやっぱり
皆離れていくのだろうか・・・・

そんなことをかすかに気にしつつもやっぱり今はこのままでいたい。と思った。

・・・・かすかに微笑みが漏れる。

と、一子がそんな俺の様子に気づき、

「良かったねっ！零斗！！」と、満面の笑みを向けてきた。

「！！ッ・・・・／／／」

『天真爛漫』がピッタリくるような邪気の無い笑顔。

・・・・・・・結構ガチでドキッと来た。

「さ、さて！これで終わりだな！」　若干赤くなった顔を隠すように言う。

そうこうしている間にも敵の人数はどんどん減っていく。

これで本当に終わった・・・・・誰もがそう思っていたとき。

「ズガガガガガガガガガアアン！！」　「！！！」　なんだッ！？

突如、自軍の中に誰かが『切り込んで』来た。その周りの自軍はあっという間に
壊滅している。　！！？？

土ぼこりが晴れる・・・・その先に居たのは・・・・

「そろそろわたしの出番かと思ってなぁ！！」

・・・・誰だっけ・・・！！！そうか！新聞で見たことあった！！

『川神百代』、圧倒的な戦闘力を誇る川神院の跡取りで『世界最強の武人』
とも言われる存在。

・・・・・・ラスボスご登場ってか？・・・・・いや、裏ボスか。

「姉さま」　「な、なんでモモ先輩が敵に・・・！」一子や島津が声を上げる

「決まっているだろう。こっちに付いた方が楽しめそうだったからだ！！」

・・・・・面白いなこの人・・・・

「楽しませてもらうぞ、愛しい仲間達！！」・・・と、

「ああ、面白いな！姉さん？」　直江が声を上げた。

「ほう？総大将を連れてくるとは、降参するつもりか。」

「いいや、この戦、負けるのは姉さんだ。

もう一度言う。負けるのは姉さんだ。」

「・・・・・この私を怒らせたなあ？大和・・・・・」

・・・・切れやすいな、オイ。

「モモ先輩、お相手いたします。」　「ほう、いい闘気だ、まゆまゆ。だが、お前一人では止められんぞ？」

「はい・・かもしれません・・しかし！！」　『まゆまゆ（本名しらね）』が言いきった直後、上からまた『ラスボス』的な『気』を持った人が降りてきた。

「この気は！！」　『先輩』でいいや・・・が飛びのいた時、軍用ヘリから

人が『着弾（？）』し、回りの奴らが薙ぎ倒された。そして、

「ハッハッハッ！！九鬼揚羽、降臨であるっ！！」　おお、九鬼財閥の人か。

「や、ややっ！！姉上！！」敵の総大将が叫ぶ。ああ、あいつもだったか。

ってかなんで九鬼家は額に×なんだろーか。そして言葉遣い古くね？？・・・

「！！・・・九鬼財閥の九鬼揚羽を動かすとは。」

「これくらいの策が無いと姉さんを止められないからね。」

直江・・・・・・すまん・・・・全部計算してたんだな・・・・・

何気に罪悪感を覚える俺・・・

「だが私はその策すら打ち砕く！！」　すげーな。

「お前のその鼻っ柱を折ってやる！！」

そしてもちろん俺も入るっ！！やっと本気で闘えそーだ！！

「そいつは・・・・楽しみだっ！！」　三人が空へと飛び上がる。

「ちょい待ち！！」　俺はそんな三人の間に割って入った。

「「「！！」」」

牽制の蹴りを先輩（達）に放ち、いったん全員が降り立ったのを見て、

「Fクラス、空裂零斗も参戦するぜえ！！」

高らかに宣言する。

「ほう？・・・私に挑んでくるという事はそれなりに腕に自信があるのだな？

・・・いいだろう。全員まとめてかかって来いッ！！」

・・・・ほお？・・・・

「じゃ、遠慮なく！！いくぜええええ！！」

『まゆまゆ』も『揚羽』さんとやらもいったん俺の実力を見てくれるらしい。

刹那、『表』の最強と『裏』の最強がぶつかり合った。

「たあららららららあ！！」

先輩が拳の連打を放ってくる。そのスピードはおそらく常人には捕らえきれないだろう。

しかし、俺はそれらを全てかわす。

こちとら銃弾見ながら生活してんだよッ！！

お互いいったん距離を取る。その距離を埋めるかのように『まゆまゆ』・・・

いや、『黛由紀江』というらしい・・が刀を振るうが・・・

「見切ったっ！（はしっ）」　先輩は二本指で真剣を受け止めた。

「そんな！所見で十二斬全てを！！」　まずい、その隙はっ！！

「とりゃあっ！！」　「きゃあっ！」わき腹にカウンターのハイキックを食らい

俺の近くに転がってきた。・・・今のコイツでは勝てん。

そう判断した俺は。

「今のはきいたろ。ちょっと休んでな。」　そういい、前に出る。

聞こえたとは思うが

言葉を返せないだろう。それほどに威力があるのだ。

今は揚羽さんが闘っている。が時間がたつにつれ、徐々に押されてきた。

「ッチ！！」　そう吐き捨て、俺も突っ込んでいく。　あ、ちょうど揚羽さんが

吹っ飛ばされたとこだ。

「たらあっ！！」　一気に懐に入り、一撃を見舞う。

わざと遅めに。

「遅いっ！！」　カウンターのパンチが放たれる。が、俺はそれを狙ってたんだよ！！

「ところがぎっちょん！！」　某アニメのようなセリフを放ち、カウンターにカウンターを食らわせる。

「くうっ！」　俺の拳をまともに食らい、後退する。そして俺の後ろにはまだ二人控えている！

「！！・・・ふっ・・・甘い！！」　しかし、それを見越した先輩は俺を素通りし、

「「なっ！」」と驚いて一瞬反応が遅れた二人の腕をつかみ・・・

「もう覚えた！！左腕、川神流『炙り肉』、右腕、川神流『雪達磨』。

これで終わりだーーーッ！！」

・・・まずい、アレを食らったら多分アウトだぞ！！ッ！追いつかない！！

と、その時。「はあ！！」「！！ふっふっ！！」　おお、また乱入者だ。

「お前は！！」

「東に強い武士娘が居るって聞いてね！」・・・いや、答えになってねーし。

「あれは・・・四天王最後の一人・・・」　おお、そういうことなのか。

「松永燕、デビュー！！」　そういって二人は空中戦を始めた。

・・・そこ俺のポジション！！

「・・・・でっもお！！」　おお、『松永』さんが先輩を殴り飛ばした。

「そおりゃあ！！」　そのまま追い打ちをかけようとするも、

「ッ！川神流、『星烏』！！」　「！！」

失敗し、地面に降りる。

「行きます！」そう言い残し、今度は復活した黛が先輩に突っ込んで行く。

・・・・俺の出番ェ・・・・・・（；、・・ω・、）

そんなことを呟いていると。　「不服そうだな。」揚羽さんに声をかけられた。

「不服だ。もう一人先輩が居ればいいのに。」と返す。

「あれ？君だれ？見ない顔だけど。」　「空裂零斗だ。」松永さんにも返しておく。

「あっと、黛がやべえな。行こっと。」　「いや、ここは我がゆく。」

「あたしが行かせて貰うよ！！」　はああ！？闘わせろよ！！

「や、ここは俺が・・・」　「いや、我が・・・」　「あたしだって！・・・」

「おれ・・」　「我・・・・」　「・・・・・・」

・・・・埒が明かん。

「じゃいーよ！揚羽さんから行けよ！（ﾟДﾟ）」　思わず言う。

「ふん。当然だ！！」　「・・・じゃー次あたしね！」　「えー！・・好きにしろ・・・」

まあ最後の方が思いっきりやれるか・・・思いっきりね・・・フフフフ・・・・

「九鬼雷神国崩拳！！」　「禁じ手、富士砕！！」　揚羽さんと先輩の拳がぶつかる。

「はあっ！」　そこに黛が割り込んだ。・・・え？おk？？割り込みおk？？？

「まゆまゆ、いい感じで邪魔だ！！川神流『致死暮輝』！！」

「！！」先輩の放った気の技を刀で切り裂くが、

「それはフェイクだ！まず一人！」　土煙からの奇襲、そのスピードについて来れず、

「！！・・かはっ！」　黛脱落。

「また遊ぼうな、まゆまゆ！」・・・いや、俺にも構って下さい！！

と、そこでふとあっちのほうを見ると・・・・まずい！！

闘っている一子の後ろで生き残っていた兵が木刀を振りかぶっている！

「！！く、そ・・ま、にあえええええ！！」

「ボヒュン！！」と音を立て、フルパワーで一子の元に向かう。

くそ！技で防ぐ時間はねえ！！

相手の木刀が振り下ろされる、一子はそこで気づいたが反応できない。

その間に俺は割って入り、肩で木刀を受けて一子を庇う。鈍い痛みが肩を襲った。

「ぐあっ！」

「零斗！！」

一子が悲鳴のような声を上げる。らしくないな。

「ったく。あぶねー奴だぜ・・・」　そんな泣きそうな顔すんなって・・・・

「れ、零斗・・・何で？・・・」　なんでって？・・・そりゃ・・・

「言ったろ？『お前の背中ぐらいは護ってやる』って。」

ありのままのことを言う。

「！！・・・・れ、零斗ぉ～～～～」

「うわっ！どした！？涙目になってんぞ！？」

「！！！な、なってないよ／／／／／！」　必死に抵抗する一子。

「さってと、あっちに戻ろう。気をつけろよ一子？」

「うん、あ、あ、あ、・・・ありがとねっ！！」　顔を真っ赤にして言う一子。

その声を背に、俺は先輩の元へと戻っていった。

このとき、一子が真っ赤になってボーっとしていたのを俺は見ていなかった・・・

戻ってみると・・・・いつの間にか二人も全員地に倒れ伏していた。

・・・どうしてこうなった！？

「・・・・さすがは百代ちゃんだね・・・・武神と呼ばれるだけはあるよ・・・」

「ごほっ・・・・・そうだな・・・・・」　どうやら二人とも腹にキめられたらしい。

「おおお・・・・やっと俺の番だな先輩。」　「ふん・・・・せいぜい遊ばせてくれよ？」

「（ムカッ）・・・・ムカッ・・・・じゃ、いくぜえええええ！！！！」

「来おおおおい！！」

一気に先輩にぶつかる・・・直前で

「ドン！ダアン！！ダアン！！」・・・ン？信号弾・・・・あ。

「「あ――――（ＴＡＴ）――――！！」」先輩と俺が拳を寸止めし、似たような表情になった。

「戦争終結！勝者、Ｆクラス！！」

「総大将、討ち取ったりい～～～」

「「「「「「「「「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！

！！！！」」」」」」」

「「えええええええええ・・・・・・・・・・・」」

風間ェ・・・・もうちょっと長引かせろ・・・・・ああ！

せっかくストレス発散できると思ったのに！！！

（（ブチン！！！））

俺と先輩から似たような音が聞こえた。

「・・・・・・・先輩。戦争は終わったけど俺らの戦いは終わってませんよね・・・・」

たすきをはずして遠くに投げ捨てる。

「・・・・そうだな・・・・・そういう手があったかッッ！！！」

先輩も同じように

リボンを取って捨てる。

「ちょ、もう戦争は終わったんだ・・・（（黙れッッッ！！！））ヒイ！！・・・」

ぶつぶつ言ってきた直江を黙らせ、

「じゃっ・・改めていくぜ先輩・・・」　「望む所だ！」

「「うおおおおお！！！」」

こうして、生き残った全員が唖然として見ている中、

俺と先輩の『川神大戦　延長戦』が始まったのだった。

第五話「戦争終結と『延長戦』の開始」（後書き）

ハイ。最近どっちかというともう一つの小説よりこっちのほうがメインになってきてる・・・

あ、あと申し送れました！評価を付けてくださった方や

お気に入りに登録してくれた方、本当にありがとうございます！

これからも頑張ります。

そうそう、『ハーレムがいい』って意見が来たのですが

基本一子一筋のイチャラブ的なもんにしようと思っております。

そこんとこご了承を・・・・

まあ二人までならおkかな？・・・今度アンケートをとるかもしれません！！

第六話「延長戦」（前書き）

ども、今回は百代さんとタイマンです。

そして遂に零斗の本気が？・・・・・・

ではどうぞ！

第六話「延長戦」

「「だあああああああ！！」」

俺と先輩の拳が激突する。これでもう四回目ぐらいだ。

本来俺はこんな戦い方はしない。今は完全にストレス発散目的だ。

・・・でももうやめた。こんなやり方じゃ全力だせねえ！

『暗殺術』。

武道とは正反対に位置する『卑怯』、とも取れる体術。

だけど、これが『俺』だ。

・・・・それに我流で行かないと・・・勝てる気がしねえ・・・・

まあでも逆を言えば我流で行けば勝てる気がする。ってことだ。

「ッチ！先輩やりますね！！」「ふっ・・お前もな！」そういって離れる。

「な、何だアイツ！」「・・・こんなに強かったとは・・・・」

「ほお・・・・・」

そんな俺らは周りでどよめきが起こっているのを知らない。
ちなみに最後のは学園長だ。今回は見逃してくれるらしい。

「だけどこっからは俺流で行かせて貰いますよ。」　「面白い。やってみろ。」

・・・う、上から目線・・・・・。

「分かりましたよ・・・」

そういい、俺は体の力を完全に抜く。はたから見れば脱力しているだけだ。

「！！・・・・舐めているのかっ！！はあああ！！」

先輩が突っ込んでくる。神速の拳が俺に襲い掛かるが・・・

「♪～～～～♪～～～～～～～～」

ふらふらと、だが無駄な勢いが一切無い動きで全てかわす。

「・・・・・・・ここっ！！」　『ドゴッ！！』

「っぐ！」　また少し後退する先輩。

「「「「「「「「「！！！！！」」」」」」」」」　皆が驚愕している。そりゃそーか、

常人には『見えない』だろうからな。おそらく先輩の目でもギリギリなんじゃないか？

『威力』よりも『速度』を重視した最速の攻撃。『静』から一瞬だけ最大の力を加える
ことで『見えない』ほどの速度を実現する。

っつっても一般人なら気絶するぐらいの威力はあるんだが・・・・・・
先輩防御力高ェ・・・・・・

「くっ！！川神流・・・・・」　　「遅い。」

『ドゴス！』とまた鳩尾に拳が入る。

「技の名前なんかを叫んでるから隙が出来るんですよ？」
大体自分の技を相手に知らせてどうするっての。

「それが『武道』と言うものだろう・・・」

「すんません。でも俺は武道なんかやってませんよ？『闘って』るだけです。」

それに・・・・この努力の末に手に入れた『我流』には俺は誇りを持っている。

だからこそそんな俺の『誇り』を人の血で汚したくないんだ。

「！・・・そうだな。おりゃあああ！！」

また先輩が突っ込んでくる。また拳の連打だ。・・・さっきより小刻みになってるな。

警戒してるんだろーか。

「・・・・・・そこっ！！」　「！！」

ほぼ反射的に体をひねり、カウンターを見舞う！・・・いける！

と思っていた。俺が馬鹿だった。

『そこっ！！』と言う声『だけ』にとっさに反応した。いや、してしまっていた。

・・・先輩は『声』だけでまだ攻撃して来てなかったのに。

「！！！しまっ・・・・・」　後悔してももう遅い。こっちに決定的な隙が出来ていた。

「（ズッドオオオン！！）ぐはあっ！！」

地面と平行に吹っ飛ぶ俺。『気』まで纏ってやがる・・『川神流』だな・・・・

「貰ったぞ！！はあああああああああ！！『星烏』！！」

有無を言わさず真空波みたいな攻撃が俺を襲う。

「ぐあああ！！！」　それをまともに受けてまた吹っ飛ぶ俺。

基本俺は『避ける』事しかしない。ので耐久力はスピードなんかと比べて極端に低い。・・・にしても・・この人・・・攻撃力・・・高・・・・・・す・・・ぎ・・・・

意識を手放しそうになる。『零斗！！』一子の悲鳴じみた声が聞こえる。

この人は強い。・・・・・・でも、

勝ちたい。

「そこまで！！勝者、川神・・・！」

止めをかけようとした学園長が驚いている。この場の全員も。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺は、満身創痍で、立っていた。再び闘志をみなぎらせて。

もう、出し惜しみなんてしない。

「やってくれましたね先輩・・・なら・・ゴホッ！！・・・・こっちも・・・・・・」

「全力全開！『フルスロットル』じゃあああああああああああああああああ・・・・・・

・・・ぐあああああああああああああああああああああ！！！」

本気の絶叫、そして。

「ゴバアアアアアアアアアアアン！！！」

「！！！」

隠してきた『気』を一気に解き放つ。圧倒的な『気』の奔流は俺を中心に、

紅蓮の台風のように渦巻いている。

これが、俺が『裏』の最強である所以、『気』の総量だ。

それを俺は

（圧縮圧縮ゥ！！体に圧縮ゥ！！！）・・・・某超能力者のようなセリフを吐きながら、

体・・・ほとんど手足に『気』を全て圧縮していく、すると。

「ボッ！」と、

俺の周りの気がなくなると同時に、手足に『火がついた』。

音もなく手足が燃えている。無論熱くは無いが。さらに、

『れ、零斗！どうしたのその目！』

俺の右目に、光が灯っていた。比喩ではなく、右目だけに本当に灯っているのだ。

表すなら『モンハン』のナルガクルガの怒り状態の様な目だ。

そして、俺の髪にも変化が起きた。右のこめかみに僅かに生えていた『ドス赤い』髪が

左のこめかみを除く頭の全てを染めていた。どうやら『これら』は生まれつきの

『才能』らしいんだが。

そして俺は先輩に告げる。

「さて、行くぜ先輩。」と同時に行動を開始する。

「ゴバッ！！」　俺の足元の土が破裂した。と同時に俺はもう先輩の懐に居た。

「何！？」驚く先輩の腹に一撃を入れる。

「（ズドオオン！！！）かはっ！」　吹っ飛ぶ先輩、先輩が地面に落ちる前に

追い討ちを食らわせる。

「（ズドドドドドッ！！）　～～～～～～～～！！」

声も出せない先輩。完全に一方的な展開になっていた。手に纏った『気』の助けで

威力も速さも跳ね上がっている。

「・・・・これで・・・・・・・・・終わりだああアアアッッ！！！！」

思いっきり体重を乗せ、『殺し』の一撃を放つ。

「グシャッ！！」　なんだかやばい音がして拳が先輩の腹にめり込む。が、

「（ぐにぐに・・）　？？？」　感触がおかしい。と、先輩が口を開いた。

「こほっ・・・川神流、『人間爆弾』！！！！」

「！！！！！！っ！まにあえッ！！」

「ズ、ドオオオオオオオン！！」

爆音が、辺りに響き渡った。

第六話「延長戦」（後書き）

はい、零斗君の本気は『化け物』でした。

まあ努力の賜物なんですけどね・・・・

次回は決着編です！！あ、後アンケートも近いうちにやるかも！！

第七話「決着」（前書き）

はい、遂に決着編です！

零斗君の化け物度がパネエ・・・

ではどうぞ。

第七話「決着」

「ゴオオオオオオオ・・・・・・・・・・」

黒煙が上がっている。そこには零斗の姿は無い。

「「「「「「「・・・・・・・・・・・・」」」」」」」

「ハッハッ・・・・・・・あいつ・・・なかなか楽しませてくれたな・・・・・。」

百代はそう呟き、この場の皆は百代の勝利を確信した。

・・・・・・いや、『していた』。

ふと、その違和感に、そこから立ち去ろうとしていた百代が気づく。

「!!この『気』・・・・・!!」

近くでありえない量の気を感じた。

煙が晴れても零斗は居ない。

「居ない！！・・・・・上かっ！！『星烏』！！」

『ゴオッ！！』波動が斬る・・・・・・・空気を。

「上でもない！？」　百代が思わず叫んだ。刹那、

『ゴボン！！！』

百代の『足元』が爆発した。

「！！」

一瞬後、すぐ目の前に、零斗の顔があった。

獰猛な笑みをその目に浮かべ、赤黒い髪と右目には紅蓮の光を灯し。

そして。

『ゴボン！！』

先輩の足元が爆発する。

そう、今まで俺が居たのは『土中』。

ウチのオリジナルの回避術だ。ほんとはやりたくなかったが咄嗟にとってしまったものはしょうがない。・・・なんでやりたくないかって？

・・・見ろ、制服が土まみれじゃねーか！！

「！！下！！？」

完全に反応が遅れる百代。

もらった！！

「空裂流、『零式』奥義！　『気突・蝕』！！！」

空裂流の『零式』・・・俺が手の加えたオリジナルの奥義。『零斗式』って意味だ。

「とすっ」　と先輩の鳩尾に拳を当てる。『気』で燃え盛る拳を。

そこから一気に自分の『気』を先輩に流し込む。

そして、それで相手の『気』をぐちゃぐちゃにかき乱す！！！

『気』とは精神力の一種だ。それをかき乱してしまえばどうなるか。

良くて気絶は免れない。最悪植物人間だ。そんなことしねーけどな。

「（スオオオオ・・・）くふっ・・・・がはっ・・・（ガク！）」

苦しそうに膝を着く先輩。

だが、この技の真の怖さはここではない。

「足止め」。それこそがこの奥義の目的。『奥義』で決めるのではなく、

『奥義』から地味かつ一撃必殺の技に繋ぐ。それこそが『零式』。

俺はそのまま先輩に向かって歩き、ポッケから『打ち根』を取り出す。

『キュガッ！！』　一気に踏み込み、首筋に突き立てる。

この動作が行われたのは僅か，１　秒。

「ぐっは！・・・・・・（バタッ）」　気絶した先輩が地に伏す。・・・・・やった・・

『フッ・・・』　『気』を解除する。

髪の赤黒い部分が戻っていき、手足の炎が消える。そして、

『・・・・・・バタッ！・・・・・』

目の光が消えると同時に、先輩の傍に倒れこんだ。『気』の助けがなければ立っていられないほどに俺は消耗していた。

『姉さん！！』

『零斗！！零斗ッ！！』

口々に声が聞こえる・・・・・・その声を遠くに聞きながら俺は意識を手放した。

～一子side～

必死に私は敵を薙ぎ払う。このままなら勝てる！姉さんも零斗達が止めてくれてるし。

・・・・たかをくくっていた。油断していた・・・

後ろを見るともう敵が木刀を振りかぶっていた。間に合わない！

思わず目をつぶってしまった。でも、

『ドスッ！・・・・グッ！』そんな零斗の声が聞こえたような気がして、

恐る恐る目を開けて、自分の目を疑った。

目の前で、零斗が木刀を肩でとめていた。

私を庇って、私のせいで・・・・・・。

「零斗っ！！」思わず叫ぶ。

「ったく・・・あぶねーやつだぜ・・・」　零斗が微笑む。

「れ、零斗・・なんで？・・・・」　思わず聞いてしまう。・・こんな、私なんかのために！

零斗は優しい、だから慰めてくれると思っていた。でも、零斗の言葉は私の予想を遥かに超えていた。

「言ったろ？『お前の背中ぐらいは護ってやる』って。」

「！！・・・あ・・」　確かに零斗は言っていた。少し前にかけてくれた言葉。

・・・・覚えてくれてたんだ・・・・

『トクン・・・』と心臓の鼓動が速くなった。

それは運動した後の『疲れ』とは似ても似つかない感覚。でもとても・・暖かくて・・・心地よい感覚だった。

「うわっ！どした！？涙目になってんぞ！？」零斗が驚いたような声を出す。

「な、なんでもないよ！！」　それだけ言うのがやっとだった。

「さってと、あっちに戻ろう。気をつけろよ一子？」

「うん、あ、あ、・・・ありがとねっ！！」　顔が真っ赤なのが自分でも分かる。

零斗は姉さんの元へと戻っていった。

私もまた敵を倒す。でも今度は、

『後ろで零斗が護ってくれている。』そう思うだけで体が熱くなった。

・・・負ける気は、しなかった。

～大和ｓｉｄｅ～

「なんだあれは・・・・・」　揚羽さんが呆然とした様子で呟く。

今俺達は姉さんと空裂との決闘を見守っている。

「はあ～・・・すごいね・・・でもあれだけの実力者がなんで有名にならなかったんだろう・・・」

燕さんもあっけに取られている・・・

今皆が見ているのは、姉さんと闘っている空裂だが。

「『化け物』・・・・・・」　岳人が漏らした。

そうだ、奴は今、もう『化け物』級になっていた。

現に姉さんは完全に押されていた。

と言うか圧倒されていた。・・と、その時、

「こほっ・・・川神流、『人間爆弾』！！！！」姉さんの声と共に爆音が響いた。

「零斗！」一子が叫んだ、だけど、

「勝負はついたな」　一子に言ってやる。姉さんは『武神』と呼ばれるほどだ。

ここまで互角に戦ったこと自体既に空裂の実力は四天王かそれ以上なのだ。

しかし、煙が晴れると、そこには誰もいなかった。

「「「え？？」」」キャップやクリスが疑問符を頭に浮かべる、俺も。

その時、

『ゴボン！！』と言う音と共に地面が爆発、空裂が居たのは土の中だったのだ。

そして一瞬後には勝敗が決していた。

地に伏した姉さん。そして同じく倒れる空裂。

「・・・・・・・・タッチの差で空裂の勝ちだな。」　キャップが呟いた。

「空裂零斗・・・・・なんてやつだ・・・・」　めくれ上がった土、でかいクレーター。

この惨状を見て、俺もそう呟くしかなかった。

第七話「決着」（後書き）

どうでしたか？一子が零斗に惚れましたね。

次回は・・・アンケート・・・かな？

どっちみち更新遅れます・・・スンマセン・・・

――アンケート――

――――――アンケート――――――

さて、こんにちは。今回はアンケートをとります。

本編の更新を楽しみにしてくれていた方は申し訳ございません・・・・・・

アンケートの内容は、ヒロインの追加です！

本来は一子一筋ルートにしようと思っておりましたが、

『ハーレムルートがいい！』と言う感想が来まして、

「どっちにしよう・・・・・・あああああ！！　（＞Д＜）」と悩みまくった挙句・・・

「・・・・よしアンケートで決めよう！」ということにしました！

・・・で！議題はと言うとですね。

『もう一人のヒロインは誰か』　です！

とりあえず選択肢も用意しておきますね。あ、ヒロインは二人なんで、

そこんとこをよろしくお願いします。

?一子だけ、純愛（?）ルート。

?百代さん。バトルするうちに・・・・・・みたいな。

?由紀江、・・・・・思いつかん・・・・。

?まさかの燕さん。結構作者が好き。

?クリス・・・・これも思いつかん・・・。

?その他

まあこんだけあげておきますね。作者の一票は「?」に入れておきます（、・ω・´）

他にも、思いつくものがあれば

ユーザじゃなくてもガンガン感想で送ってください！！よろしくお願いします！！

第八話「戦後の団欒」（前書き）

ども、今回は保健室での１エピソードです！

ではどーぞーーー

・・・最近眠くて前、後書きがぜんぜんかけてません・・・

そこんとこご了承を・・・・

第八話「戦後の団欒」

「・・・・・・ん・・・・・・何処だここ・・・・」

「ああ、保健室か・・・・保健室ゥ！？」

おかしい。さっきまで丹沢山地でバトルをエンジョイしていたと言うのに、

ってか一回学園に帰ったんかい！

「・・・・・結構時間がたってんな・・・夕方か・・・・・」

保健室には今は誰も居ない・・・・・・

「あ、零斗起きた！？」

「おう、起きたのか！」

「おはようございます！」

「や～っと起きたようだな、なんかいらいらするからもう一回闘え。」

・・・・・・はずがなかった。もう放課後のようで、俺の回りは今Ｆクラスの連中でいっぱいだった・・・

「・・・あの人が百代先輩に勝ったっていう・・」

「・・・何気にカッコいいんですけど～！」

見ればドアが少し開いている。どうやら入り口にもぎっしり居るようだ。

ってか、何気って何だ何気って、失礼だろ！

「・・・・・・！・・・・・・！」

「・・・・まさか・・・・ねえ。・・・・・・！」

各自がやいのやいのと騒ぎ立てている。
ちょっとやかましすぎんだろこれ・・・・・・

「お前らちょっと黙れ。・・・で？何でこんなに居るんだ？」

「いや、ちょっと様子見に・・・・」　「嘘つけ。」

何でこんなに大人数かって聞いてんの！！

「いや・・・・その・・・・ね？ちょっと改めて・・」　一子がなんか言ってます。

「改めてって何だ改めてって。」

「や、その・・・皆がさ、自己紹介とかしときたいって・・・」

そういうことですか。嬉しいな。

「・・・・じゃ、改めてよろしくな、直江大和だ。」　「おう、よろしくな。」

「大和の姉、百代だ。さて、さっさとリターンマッチを・・・・」

「落ち着け。」

後姉？姉貴分ってことかな？

「俺は風間翔一、キャップって呼ばれてるぜ！！」　「なしてキャップ？？」

「「「さあ？」」」　・・・・オイ。

「僕は師岡卓也。よろしくね。」　「おお、よろし『島津岳人だ！！』『一子だよ！』

『椎名、京。』・・・・被せんな！！一子は分かってるから！」

「で・・・」　「あたしは・・・」　「俺は・・・」

・・・・いかん。このままだとクラス全員の名前を聞くことになりかねん。

もう覚えてんのに。

「静かにしろ！！」　大声で怒鳴る。

「「「「「・・・・・・・・・・」」」」」　よし静かになったな。

「あー・・・もう全員覚えてるから大丈夫。　後は俺か。改めて、空裂零斗だ。
よろしくな。」

「「「「「「「「おう！！！（キーン・・）」」」」」」」　うるせえ！ちょっとくらっとしただろーが。

と、そうこうしていると、

「（ガラッ！！）　あー！！いたよ！！」　「おお！真だな！」

勢い良くドアが開き、燕（松永さんって呼んでた。）先輩と揚羽さんが入ってきた。
そして燕先輩が勢いよく俺の肩を掴み、

「ねえ！さっきのあれ何！！何の流派！？」　楽しそうに聞いてきた。

「ちょっ、やめっ・・・・・・揺するな！！」

先輩の手を払いのける俺。

「で、結局お前は何処の流派なのだ。」　「それは私もぜひ聞きたいな。」

揚羽さんと百代先輩が今度は聞いてきた。

「企業秘密です。」まさに企業秘密だな。

「「「「「ええーーーーー」」」」」　「やかまし！」

お前らもそんながっかりした目で見んな！罪悪感沸くだろーが。

「ケチいなー・・・まあそれはともかくとして！零斗君！『四天王』にならない！？」

燕さんが何か提案してきた。・・・・・・・・・・・・・・・までや。

「四天王って今いっぱいじゃないですか。」

「うん、だからもう五天王で良いやって思ってさ！・・・・で、どうよ！！」

期待に満ちた目で聞いてくる燕さん。ちょ、そんなキラキラした目

で見んな！
マジで罪悪感が！
・・・・罪悪感とか言いながらすでに殺人罪やっちゃってるんだけどね・・・・・

「お断りします。」　丁重に断る俺。

「！・・・なんでさー！！」　燕さん・・・あんたは駄々っ子か？
「ほんとに何でだよ？」　大和も聞いてくる。・・・・それ答えなきゃダメ？

「理由も言わないといけないんですか・・・」　「うん。それ相応のがあるんでしょ！？」
何でこんなにテンション高い？

「一つ、有名になりたくない。二つ、色々とめんどくさい。」　・・・『色々と』ね？
そして、
「で、最後、四天王って『武道四天王』でしょーが。」
「それがどうしたの？」　・・・気づけ。

「分かんないですか。俺がやってるのは『武道』なんかじゃないからですよ。」

・・・・・そんな生易しいもんじゃないんだよ！

「！！・・・・・そうだな、あれは武道ではなかったな・・構えもなかったし。」
お、百代先輩が気づいたみたいだ。

「そーゆうことです。まあそういうわけで丁重にお断りします。」

「むうーーー・・・・・・・・捕まえて『遊べる』と思ったのになー・・・・」

「あ、それ同感だ。」　「右に同じである！」

「やめろ。」　あんたら俺を一体なんだと思ってんの？あんたらの遊びに付き合ってたら
過労死してまうわ！

「まあそういうわけで、もうそろそろ俺達は帰ろうぜ。じゃーな零斗。」「おう。」

大和が声をかけると

「おう、帰ろうぜい！」　皆は次々と帰っていく、

「しょーがないなあ・・・じゃ、またね！零斗君！！」　「さよなら～（，∀、）／」

にこやかな笑顔で先輩方を見送る俺。・・・ふう。

残るは一子だけになった。何かさっき大和に『頑張れ』とか言われてたけど
どしたんだろーな。

「ふいー。嵐は去ったか・・・」　と一段落していると

「れ、零斗？」　一子が声をかけてきた。　？？

「あ、ありがとね・・・・庇ってくれて・・・・あの時・・・・・」　・・・ああ。

「気にすんなや。たいしたダメージでもなかったし。」

「そう、よかった。でもお礼は言っておきたいから・・（ほんとに・・嬉しかったし）・・」

最後の方が全く聞こえなかった。もうちょい大きく喋れよ。らしくないな。

「あんだよ、らしくねーな。」　「！！なにおう！」

「・・・にしてもさ、零斗ってほんとに強いんだね！
姉さまに勝つなんて！びっくりしちゃったわよ。」

「どーも。」

「ねえ、今度私と一緒に訓練・・『断る。』ええーーなんでよおー。」

なんでってそりゃ・・・・暗殺術を同級生の女子に教えるって・・・・
ねーだろ・・・

「ウチのは門外不出なんだ。もしこの秘密を知ったら殺されちまうぞ～？」
ちょっとからかってみると

「ひいーー！やっぱいいです！！いいです！！」　・・・・こいつ面白っ。

「はは、冗談だって。」「むうーー、騙したわねーー？」

そんなたわいも無い話をする。

・・・何かこんな生活って・・・いいなーーー。

クラスの皆とも打ち解けて、めでたしめでたしだ。このままずっと過ごしてーなー。

・・・そんなことを考えていると、ふと大事な事を思い出した。

・・・・・・Ｌクロ！！

「！！・・やばいやばいやばい！！　なあ一子！俺のアタッシュケース知らねえ！！？」

一子の肩を掴んで聞く。思わず顔の位置が近くなるが、そんなこと構ってられねえ！

・・・あれ見られたら全てが終わるんだよ！！

で、そんな一子はというと、

「！！！！／／／／れ、零斗！？ち、近いよ～／／／／／／零斗の荷物は全部そこにあるから～。」

真っ赤になって超おろおろしていた。・・・・『そこ』？？

テーブルの方を見ると、確かに俺の荷物一式（アタッシュケース含む）が置いてあった。

「！！」　ベッドから飛び降り、アタッシュケースに駆け寄って中身を確かめる。

「中身！・・・おｋ～～、ほっ・・・・・」　どうやら誰にも見られてない。

・・・と、

「ねえ、零斗、その中何が入ってるの？」　一子がこっちに来た！

「！！！（バタン！！）い、いや？なんでもねーし！」　必死に隠す。

「あやしいわね～」　「い、いや！・・・そうだ、もう遅いし、帰ろうぜ！・・・な！？」

「うん！いいよ！！」

・・・あっぶね！コイツでよかったあ・・・・・・まあもう帰るかな。

「よし、帰るか。」　「うん！」

こうして、俺は晴れやかな気持ちで学園を後にしたのだった・・・・・

第八話「戦後の団欒」（後書き）

はい、どーです？

零斗は徐々に理想へと近づいていますね。

さて！次はドキドキのアンケート結果です！！お楽しみにー！！

あ、結果に文句やクレーム等はつけないで下さいね・・・・

作者はメンタル弱いんです・・・でっはでは～

――アンケート結果♪――

こんにちは！今回はアンケート結果です！　たくさんの回答、ありがとうございました！

こっからの感想は一応締め切らせていただきました。

もう作者の中でストーリーは大体決まっております！！

・・・さて、いよいよ結果発表です！！結果は・・・・

純愛ルート・・・・3

＋百代ルート・・・・4

＋由紀江・・・・1

＋燕さん・・・・？ヽ（ヽ（ °ヽ（ °∀ヽ（ °∀ °ヽ（ °∀ °）ノ

。∀。）ノ∀。）ノ。）ノ）ノ

＋クリス・・・・2

・・・・と言う結果になりました！！

燕さんの圧勝で～す！！・・・・圧勝過ぎんだろこれ・・・・一人だけ二桁やねん・・・

でもってですね。こっからのストーリーは一子と燕先輩の二人ルートになると思います。

『天真爛漫な2人に振り回される零斗』にしようと思ってます。

この案をくれた近衛鏡也さん、ありがとうございます！使わせていただきます！

・・・どストライクな感じでした！いやまじで。

あ、後ですね、この物語が完結したら次もまじこいで書こうと思ってます。

（ほとんど同じような『裏』形の主人公で、またまた『心を閉ざし

た主人公』で、
こーゆうの大好きなんです。パクリだと思う人は思えばいい！）

こんときのヒロインは燕さん一択にしようと思っていますので、まあよろしくお願いします

・・・といっても『闇殺し』を止めるつもりはさらさらありませんけどね！

こっからも果てしなく続けていく予定ですのでご安心を。

気が早いか・・・でも、燕さん一択もマジで書いてみたかったんですって！

燕さんファンの人は乞うご期待？（もう二十歳すぎてるかもね♪ｗｗ）

・・・さて、アンケートと言うものは多数決ですから、少数派の意見を無視するような
形になってしまいます。本当にすみません・・・

『不死川　心』など、？を選んでくれた人も、設定まで書き添えてくれた人も、

全部参考にしていくつもりです。ヒロインはしょうがないですが・・・

少数派だった人も、燕さんファンも（作者込）、アンケートを送ってきてくれた人全員に
感謝しております！本当にありがとうございました！！

しっかり更新していきますので、これからもよろしくお願いします！！

一作目としてＩＳでまだ書いているのですがぶっちゃけこっちメインにします♪

～アンケートｆｉｎ～

第九話「EXランク」（前書き）

ども！今回は『裏』面です！

EX初ミッションは鬼畜！

ではどーぞ。

第九話「EXランク」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」俺は今、とあるマンションの自室にいる。

「・・・・・『クラスの皆とも打ち解けて、めでたしめでたしだ』・・・」

って思ってた時期もあったよ？・・・・・・・

そんなさっきの俺をぶっ飛ばしてやりたい。自分、『依頼』が無いからって
チョーシ乗ってました！

現在の俺はケータイの画面を見てわなわなしている。ケータイのがめんには『EXランク』
の依頼が一件・・・・

現在、中東国○○○・○○で大規模な紛争が発生中。国際連合の要請により、

空裂零斗に戦場にいる逃げ遅れた住民の救助と紛争の鎮圧を依頼する。

報酬は１５００万円、国連軍も戦地に赴いている。

移動方法は・・・・・・・・・・・・・・・・・・

――

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・なんか違くね？？？

これ完全に暗殺者のできる領域超えてるよ！！？

俺は傭兵か？　ソレスタルビー〇ングか？

・・・・・・・違うわ！！　確かに『ＥＸ』ではあるけども！！

と、『ｐｒｒｒｒｒｒｒｒｒ』ケータイが電子音を奏でた。

お、ケータイに通話とは珍しい。とりあえず出よう。

「はい、空裂です。」

「ふふ・・・・・・元気かの？」　「黙れ糞ジジイ、今回はあんだあ！？」

何を隠そう、自分の祖父（俺を暗殺者にした張本人）だった・・・・・

「依頼が来ておるじゃろ。今回のは大きいぞ～・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」　大きすぎるわ！！

「何であんたが知ってんだ！」

「そりゃーなー、政治の裏はわしが一番良く知っておる。で、今回の件だが、
日本政府は国連に貸しを作れてホクホクのようじゃ。というわけで、しくじるでないぞ。」

アンタどこまで情報通なの・・・・ってか

「・・・・なあ、俺はもう暗殺業はやめたいってずっと前から・・・
『駄目じゃ』
なんでだよ！」

「よいか、我が空裂家は代々暗殺業を生業としている。伝統なのじゃよ。
その伝統をお前の代で潰すのは許さん！お前はそんな中でも光る逸

材じゃから
なおさらな。」

・・・・ブチッ！

「なんでだよ！俺の好きなように生きたっていいだろ！！この・・
わからずや！！」

「黙れ！空裂家の伝統を汚すな！お前はただ任務を遂行することだけ考えておれば
よいのじゃ！！いいな！！！『ガチャ！』」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・・・・これだ。口を開けば伝統だの誇りだの、挙句の果てには聞く耳持たずだ。

・・・・昔はいい人だったのにな・・・俺に『素質』があると分かってから
態度が一変しやがった。俺を道具みたいにしかあつかわねえ、ゴミジジイだ。

「・・・・チッ！いつかやめさせてやる・・・」

そんな言葉を呟きながら俺は準備を始める。今回は人命救助に『鎮圧』って事は

殺さなくてもいいんだ。

ならまだましだ。

そう思いつつ俺は物置として使っている小部屋に入った。そこには暗具や銃器、その他もろもろが並んである。（整理整頓はしてあるよ？）

「これにするか・・・・」

俺が手に取ったのはその中でもひときわ目立つアクリル製の対銃弾防盾（二枚セット）だ。

形はよく機動隊が使っているようなやつ。大きさは・・・・一枚目ははるかにでかい。

俺の全身を覆い尽くしてなおまだまだスペースが残っている。

二枚目はピッタリ俺の身長と同じくらいだ。

・・・・この重装備を使う日がこようとは・・・・・・

そしてもう一つ、対集団用の散弾銃、俗に『ショットガン』と呼ばれている銃だ。

名前は『ＳＰＡＳ（スパス）』、１２発の散弾はもちろんゴム弾だ。

そのほかに拳銃を二丁（同じくゴム弾）と『打ち根』を持ち出し、

オーダーメイドで作ってもらった超巨大なバッグ（てかカバー）に詰め、

マンションを出る。どうやらヘリで連れてってもらえるらしい。

「はあ・・・・っと、しょーがない？のかなあ・・・・」

そう呟きながら俺はマンションを後にした。

・・・・あれ？俺って国際的に有名人？？いや、今回は名指しじゃないか・・・。

日本政府からの名指しってだけだな・・・・ふう・・・・・。

～数日後～

「・・・・・ここからか・・・・・」

軍用車両の中でポツリと呟く。現在地は国連軍の車両の中にいる。と、

「（なあ、さっきから気になってるんだがあの少年は誰だ？日本人だよな・・・・）」

「（ああ、なんでも日本から派遣されてきたらしいが・・・・）」

英語で周りの屈強なアメリカ兵達が話していた。無論俺には何のことやら
さっぱり分からない。

「（おいおい、冗談だろ？こんなガキ一人をこんな激戦区にやるってのかよｗｗｗ）」

・・・お、何か笑った、・・なんか・・・馬鹿にしてね？　と、
その隣の男が

「（その辺にしておけ。）」　とその場を沈めた。ＧＪ！

「（日本は軍隊をあまり出したくないんだろう。こんな化け物を一人送ってきたって訳だ）」

なにやら説明している。聞こえてないフリをしていると。

「あんた、名前は？」

さっきの一人が聞いてきた。

「日本語喋れるんかい！」　「ああ、前は日本にいたんだ。そこでちょっと裏の仕事を・・」

・・・・げ・・・・。

「で、名前はなんていうんだ？」

「・・・空裂零斗だ・・・」　どうしよう、嫌な予感しかしない・・・

「!!!」　ほらこの反応!!

「・・・やっぱりか！いやー心強い！まさかあの『紅蓮の疾風』がいるとは!!」

「・・・・なにそれ!?初耳なんですけど!!」

何で聞くたびに二つ名が違うの!?何個あんの!!?

「（・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・）」

その男が他の皆に何かを話す、と・・

「「「（ほ、本当か!!）」」」

・・・・・やめろよ！大体反応読めたよ!!だってさあ！急に皆態度が友好的になったよ!?

「Ｎｉｃｅ　ｔｏ　ｍｅｅｔ　ｙｏｕ　Ｒｅｉｔｏ！！」　「Ｎｉｃｅ　ｔｏ　ｍｅｅｔ　ｙｏｕ　・・・ｔｏｏ・・・」

皆がメッチャ握手を求めてくる。やめてそうゆうの！！と、そうだ。

「あんたの名前は？聞いてなかった。」

「ああ、『ガルシア』だ、ちなみにこの部隊の指揮を執ってる。よろしくな。」

「！そうか、よろしく。」　握手を交わす俺とガルシア（さん）。

「他のみんなにもよろしく言っといてくれ。」　「わかった。（・・・・・・・・・）」

「「「「ＯＫ！！」」」」　「・・・・・そ、そうか・・・よろしく・・・・」

軍属なのに妙にフレンドリーな人たちだった・・・・・

～しばらくして～

「きたぞ！皆、配置につけ！ゴム弾しっかり詰めとけよ！！」

ガルシアが叫ぶ。

「ガルシア、俺はまず住民を救助する。皆はまず鎮圧と足止めを頼みたいんだが・・・」

「おう！！任せろ！！」　「頼んだ！！」　そう言い、
俺はまず小さい二枚目の盾を背中に背負った。この盾は後ろからの
攻撃を防ぐためだ。

そして巨大な方の盾を左腕に装着、右手にショットガンを持つ。・・・
・よし！準備完了！

「っしゃあ！まず俺は先に行かせて貰う！後は任せたぜ！」

「「「「「「（応ッ！！！）」」」」」」

そして俺はバリケードを飛び越え、市街地を突っ切っていった・・・
・

「ガキン！」　飛んでくる銃弾を俺はかわし、受け止め、風のごと
く自陣のバリケードを
超えて戻った。

脇には子供三人とその両親、つまり一家族を連れて。

「おっしゃ！これで全部だったぜ！？」
そう、既に市街地にいた住民はもうおそらく全て　こっちに運んだだろう。

「・・・・・・なんて手際だよ・・・・やっぱ噂どおりだな・・・零斗・・」

ガルシアが感心したような声を漏らした。他のやつらはというと・・・・

「（・・・・・・・・・！・・・・・・！）」

何か感心というか感激していた・・・・・・・・

「どーも・・・嬉しくねえ噂だな・・・・」適当に返す・・・

「（・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・）」　俺が救った家族の父親らしき人が

何か話しかけてきた。傍には男の子もいる。

言語はさっぱり分からないが、ひたすら感謝しているというのはすぐに分かった。

なんだか少しほっこりした気分になった。・・・・人助けって・・・・いいな・・・・

親子に笑いかける。言語は分からなくても笑えば気持ちは通ずるもんだ。

男の子の頭を撫でてやり、父親に避難所に急ぐよう身振り手振りで教える。

何とか伝わり、二人は手を繋いで去って行った・・・・・・

「・・・・・・父さんってあんなのなんかなあ・・・・・・・」

ふと羨ましくなってしまう。俺にも父さんはいたが小さいころは両親とも『裏』で働いていたためほとんどあったことは無い。　で、いつの間にか死んでいた、って感じだ。

「・・・・・さて、切り替え切り替え！もうすぐ終わる！」

そう自分に喝を入れる。まあもうすぐっつってもあと一週間はかかるだろうがな・・・・

「よし！俺にはこの盾があるからな！ちょっと暴れてくるぜ！○○側は俺が鎮圧する！
皆は××軍の鎮圧を頼んだ！ガルシア！」

「分かった！（・・・・・・・・・・・・・・・・・・・）」

「「「「「OK！」」」」」　「っしゃ！いくぜえええええええ！」

そういって俺はバリケードを飛び越え、一気に○○軍のバリケードに向かった・・・・

敵がアサルトライフルの集中砲火を浴びせてくる、だが俺は避けもしない、

それらの弾は盾に当たって全て跳弾に変わり、向こうを威嚇する。

しかしそのうちの一発は俺の髪を掠めた。

・・・・・・これだ、この空気こそが『戦争』だ。武道だの川神大戦だなんて遊びみたいなもんだ。　気を抜けば死ぬ。これが戦場、これこそが戦場。

「ッツ！！（ダアン！！）」　一気に敵のバリケードを超え、スパスでまずは近くの数人を気絶させる。

（ダアン・・・ガシャッ！ダアン！）　すぐにポンプを引き、再び数人を薙ぎ倒す。

それをずっと繰り返しているうちにあっという間にそこに居座っていた大部隊の

半分ほどが気絶した。しかしそこでスパスも弾切れになった。

「まだまだあ！」　そう叫んで背中の盾を左手に装着しなおして突撃、

右の巨大な盾で数人を殴り倒す。『気』を地味に腕の強化に使っているので

あんまり疲れない。

「『ドゴッ！バキイ！メコッ！！』ッハハー！あたらねえよ！！」

よし！残りは三分の一以下だ！

そう思い、俺はスパスと盾を両方とも捨てると同時に打ち根を取り出し、一気に相手集団の中に飛び込んだ。

『バタバタバタッ』と音がした後そこにあるのは屍（死んで無いけどね）だけになった。

スパスと盾を回収し、急いで自陣に戻る。とちょうどガルシア隊（仮）も

相手を制圧した所だった。

「お・・・同時だな。」

「一人と一個中隊で同時って・・・・・・やっぱスゲーよお前・・・・」

「・・・ありがとよ。さて、静かになったな。いったん休もう。」

と、水を飲んでいると、

「この市街地での銃撃戦は沈黙した模様です！」と声が聞こえた・・・日本語・・・・

あれ？・・・・・・・戦況レポーターか・・・・日本の・・・・

「あ！！あなた！日本人ですね！ちょっといいですか」　「ちょっともよくない！」

・・・戦場だぞ！何のんびりインタビューしてんだ！

「あなたは日本から派遣されたんですか！？」　・・・・うぜえ・・・

「そーだよ！はいはい、もう撮んな！めんどくさい。あっち行けや！」

「あなたはまだ子供のようですが！？」　・・・・・ムカッ！

「・・・・やかましい。『行け』と言っているんだ」

「！！・・・は、はいい！分かりました！失礼します！！」

ちょっと殺気を込めて言うとそういって若い男のレポーターは風のように逃げていった。

・・・・やべ！これ映ったかも！！・・・・やってもーた！帰って隠し通せるか・・・？

帰国後に一抹の不安の覚えつつ、アメリカ兵の皆と僅かな休息をとるのだった・・・

・・・結果、アメリカ兵の皆とメッチャ友達になれた・・・皆良い人だッ！

第九話「EXランク」（後書き）

はい、まさかの武力介入ｗｗｗｗ

零斗君の実力は政府のお墨付きですね・・・・

では、次回もお楽しみに！！

第十話「終戦とガチな疲労・・・」（前書き）

どもども！作者です！

今回で紛争編は終わりです。っていっても二話分ですがね・・・

零斗君は相当お疲れのようです・・・・

では、本編をど～ぞ～。

第十話「終戦とガチな疲労・・・」

～七日後～

「ゼエ・・・ゼエ・・・終わったぜチクショー・・・・・・」

現在、俺達は二国間を飛んで周って両軍を制圧しまくった後だった。

今までほとんど一睡もせずに。徹夜慣れしてても流石にきつい・・・・

国連からの再三再四に渡る警告（脅迫）で今日やっと二国間に停戦条約が締結されたそうだ。

「・・・・・さすがＥＸ・・・なんでもありなんだな・・・・・」

一人ごちる。・・・と、

「くっ・・・・・駄目だっ・・・・・・・・」

ガルシアが悔しそうな声を漏らしていた。そこを見ると、

「（隊長・・・・・俺は・・・・・役に立ちましたかね・・・・）」

「（馬鹿野郎！役に立ってないわけ無いだろ！！おい・・おいっ！）
」

兵士の一人がまさに今息絶えた所だった。他にも数人の負傷者が出ている。

「・・・・・（ゴン！）くそっ！！俺がしっかりしていれば！！」

悔やんでいるガルシア。・・・・・・・・戦争となれば犠牲も覚悟していたが・・・・

正直俺もやりきれない。

「ったくよ・・・・他国の戦争止めに行って死ぬなんて・・・・・これじゃ俺達が
馬鹿みてーだよな・・・・」

「ああ・・・・なんでこいつらが・・・・・ッ！」

「・・・ガルシア、悔しいのは分かる。だけどな、アンタはこの隊のリーダーなんだぞ？
帰りに強襲されるかも知れない。そんなときにアンタがそんな状態でどうすんだよ！
・・・アンタはこの隊をこれ以上一人の犠牲者を出さずに国に導く義務があるんだ
それは忘れんな。」きつめな声でガルシアに問いただす。

「！・・・・そうだな・・・・ありがとう・・・・。よし！皆！国

へ帰るぞ！」

「「「・・・・・・・・ＯＫ」」」

「おっと、俺は帰りはこっちだからここでお別れだ。・・・また会うかもな。」

「・・・そうか、・・・正直『紅蓮の疾風』はもっと・・なんて言うか・・・
冷酷なやつだと思ってたよ。」

・・・・心外な！

「悪かったな！あとその呼び名やめろ！・・俺は殺し屋を廃業したいと思ってる。
もう人を殺したくは無い・・・わがままかも知れないけどな。」

「！！・・・いや、人を殺すことで悦ぶようなやつよりよっぽどましさ。
また会ったら宜しくな！」

「ああ！」

俺は仲間の皆と握手を交わし、帰路に着いた・・・・・・・・

・・・・・・・・が、空港にて、

「ふ～・・・終わった終わった・・・・・・ってかショットガンとか絶対止められるよな・・」

ただでさえこんなでかい盾(カバーはしてあるが)で目立ちまくってるのだ。
これじゃ帰れねーじゃねーか！

・・・しかし、以外にもお咎めなしだった。どうやら日本政府が言ってくれていたらしい。
機内に入る。

「ふい～・・・シート柔らけえ～・・・ちょっと・・・・いや、爆睡しよ・・・・」

そう言い、機内でふかふかのシートに身を預け、目を閉じた俺だったが・・・・

「（・・・・・！！・・・・～～～！！・・・・・！・・・・）」

「「「「「「「「・・・・・・・・・！！！・・・・！・・・・！・・・・！！！！！！！！」」」」」」」」

（・・・・・・・・・・・・・・・・・・うるせえええええ！！！）

俺の目の前の席では誰かが大喧嘩しているし、何か修学旅行かの集団が騒ぎ散らしていた。
・・・・・ぜんぜん眠れん！

俺が乗ったのは現地を離れた別国の空港、なので仕方が無いが・・・
にしてもうるさすぎる！礼儀を知らんのか礼儀を・・・あ、しらね
ーのか・・・
この人たち外国人だし・・・概念が無いのかな？・・・・・・

そういい、普通に座っていた俺だったが・・・

・・・ぜんぜん治まらない・・・・・むしろ酷くなっている・・・
周りを巻き込むな！・・・周りの奴らも妙にノるな！！

結局、フレンドリー集団の中で寝たフリ（ぜんぜん寝れてない）を
していた俺は
閉口するしかなかった・・・・

そして・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

周りがやっと沈黙した時、俺は徹夜明け特有の奇妙なテンションに
なっていた。

「あ～～～～・・・・・・逆に寝れねえ！」　一人機内で叫ぶ俺・・
・

結果的に俺は一睡も出来なかったのだった・・・・・・

～羽田～

「ね・・・眠い・・・過労死する・・・・」

羽田に着き、嘆息する。・・・早く帰りたいよーー・・・orz

と、

「居ました！映像に映っていた少年です！！」・・・・ン？

「あの、あなた○○国に行っていましたよね！？」

「あの・・・・！」「あなたは・・・・・・・！」「なぜ・・・・・・」「どこの・・・・！」

あっという間にレポーターらしき人に囲まれてしまった・・・・

「あ゛・・・・・・・・・・」

・・・・やばい！やっぱり映ってた！！

「・・・すんません、ノーコメントで」　有名人のごとく言ってみるも

報道陣はやいのやいのと騒ぎ立てる・・・・こっちは・・・眠いっつーのによー・・

「ちょっと黙って・・・黙れ。こっちは眠いんだよ！」と脅してみたが、

「では静かに聞きますね？あなたはなぜあそこに行っていたのですか？」

・・・いや、そうゆう問題じゃねーんだけど！？

・・仕方が無い・・・・・・・・・・逃げよう。

「それはですね・・・あそこの人に聞けば分かりますよ。」

そういって俺は一点を指差す。と、

「「「「「「え？」」」」」」　報道陣の目が全て俺が指差したほうを向いた。

・・・・・・・GJ俺（≧∇≦）b

「ダッシュ！」　その隙に俺は全速力で報道陣の間をかいくぐり、・・・・・逃げた。

それはもう脱兎のごとく。

「あ、逃げたぞ！」遠くでそんな声が聞こえた。・・・遅いわ！！

「へへーん、・・・・・・よし、帰ろ。って、今日学校か・・・・」どうしよっかな・・・

いこっかな・・・いくまっかな・・・・と悩んでいると・・・

「あ、出席日数やばいんじゃ！！？」　・・・・決まったわ。

「学校・・・学校・・・・・・」　呪詛のように呟きながら俺は家へと向かった・・・

～学園～

「・・・・・・ツイタゾオ・・・・・・ガクエンダ・・・・・。」

疲労のあまり片言になって呟く。

ここに来て俺の疲労はピークに達していた。・・・ほんとに過労死する・・・・

「かはっ・・・もう授業始まってるな・・・・」　そう言いながら階段を上がる・・・・これだけの動作が果てしなく苦痛に感じる。

そうこうしているうちに教室の前に来た。ドアを開ける。

「『ガラッ！！』ハア・・・・・ハア・・・おぐれでずんまぜんで

しだ・・・・」

「「「「「「！！！！」」」」」」

クラスの皆がざわつき始めた。・・・あれ？

もしかして・・・・ばれてない？

「れ、零斗、どうしたの？」「お前・・・一週間も何してたんだよ？・・・・・」

「っつかお前どうしたんだその顔は！？」　「酷い顔になっているぞ？」

・・・・おお、ばれてないようだ。

「へ？・・・・・・顔？・・・・・・」ふとガラスに映った自分の顔を見る・・・と、

「うわ・・・ひでーな・・・・」

確かに酷かった。幾重にも隈ができ、目は虚ろになっている。

死に掛けてるように見える・・・・気もほとんど使い果たしたし・・・・

「・・・・・まあいい、無断欠席の理由は後できっちり聞かせろ。席に着け。」

今は歴史の授業だったようで梅子先生がいた。・・・・・ってか言ってなかったっけ・・・

・・・・理由言えないんですけど・・・・・・

「はい・・・・・」　ふらふらと自分の席に着く。

「（零斗、ほんとにどーしたのよ。死にそうじゃない。）」一子の問いに

「（ちょっと諸事情でな・・・・詳しくは聞くな。）」テキトーに答える。

こうして、俺の最後の戦い（真剣で。）が始まった・・・・生きて帰れるかな・・・・

第十話「終戦とガチな疲労・・・」（後書き）

はい。一週間もぶっ続けて完徹とか良く学校いく気になりましたね・・

次回は・・・・燕先輩かな？・・・・・

乞うご期待！

第十一話「放課後」（前書き）

ども、今回と次ぐらいは燕さんと零斗君です！

燕ファンの皆様・・・・口調とか違ってたらすいません・・・・

必死にｗｉｋｉ見てやったんでどーかお許しくだされ・・・・

ではどうぞ。

第十一話「放課後」

～授業終了後～

「気をつけ、礼！」　号令がかかり、今日の学園は放課後に突入した。

「う・・・・・・・うぼあーーーー・・・・・」

俺のライフは数学と英語？でとっくに０だ。

「零斗、帰ろ！」　一子が元気に声をかけてきた。・・・その元気を分けてくれ・・・

「おう、今日は俺達とも帰ろうぜ」

『風間ファミリー』の皆も声をかけてきた。が。

「わりい、今日は先に帰ってくれや。明日な。」

俺は今日、一歩でも少ない方法で家に帰るつもりだ。つまりは・・・

・・

・・・・・・電車やねん！！

「・・・そうか、じゃ～また明日な。」　「ばいばい零斗！！」

「うむ、またな。」

「おう、誘ってくれてありがとな。じゃな～。」

一子たちが教室から出てからもしばらく席を立つ気になれなかった。

「うううだーーーーー・・・・・・・・・よっし！帰ろう！・・・

・電車で！！

少しでも疲れないように・・・・死なないように！！」

と、勢いよく教室のドアを開け放つ。『スパーン！』と良い音がする。

そして、俺はオレンジ色に染まる廊下へと歩を進めた・・・・・

・・・・・進めたのは良いのだが・・・・・

「ん？・・・・・んん？？・・・・あがっ！・・・・しまったぁーー

ーー！！」

気づいた、気づいてしまった・・・・・

「さ、さ・・・・・・・・・・」

「財布忘れたあああああああああああああああ！！！！！」

ｏｒｚ・・・・

俺さ・・・思うんだ・・・・・・・・俺ってさあ・・・・・・詰めが甘いよね☆

いっつも☆

「・・・・・・・・・・・・・」

もはや声すら出ず、俺はとぼとぼと学園を後にした・・・・・

ごめんね皆・・・・・・・

～河川敷～

「はあ、はあ・・・・くっは・・・・・まだぜんぜんある・・・・」

延々と続く河川敷を歩く。自宅は学園からそう遠くは無いのだが・・・・

今の俺にとってはね・・・・・地獄なんだよ・・・・・

「ああ・・・・足が重い・・・・・・早く眠りたい・・・・『永眠り』でも良いから・・」

自分では見えないが、今の俺の目からは艶が消えうせていることだろう。

思い体を引きずり、とぼとぼと帰っていると。

「あれ?・・・・・・・あーー、零斗君だ!!おーい!!」

誰かが声をかけてきた。だれ・・・だ?・・・・

振り返ってみると、

・・・・・・燕先輩が走ってこっちに来ている所だった。

「どーしたんですかせんぱい・・・（棒読み）」

「いやさー！せっかくだから一緒に帰ろうと思って！・・・・・・ってうわ！

どしたのさ！目が死んでるよ！？」

ちょ、大声出さないで・・・・・・・・・・・・・あれ、目が霞んできた・・・・・・

「えっと、じ、じょうがあって・・・・・・いっしゅう、かん、寝てないんです・・・・」

足元もおぼつかない・・・・

「なんでさ・・・・・・・・でも！そんなときにはこの・・・えと・・・これ！」

そういい、腰につけた鞄から何かを取り出す先輩。

「・・・・・・・・・・なんすかそれ？・・・・・・納豆？？」

「ふふ～ん。よくぞ聞いてくれました！この『松永納豆』！食べればどんなに疲れてても

すぐに回復！『松永納豆』をどーぞ御贔屓に！！」

「まじですか」

「まじまじ。今の零斗君の死んだ目もあっという間に元通り！」

「やかまし。」

最低限の会話しかしない俺。

「で？何でそんなにぼろぼろなの？一週間ぐらい学校にも来てなかったよね？」

「！何で分かるんです？三年でしょ？」

「・・・・・・（あの後毎日誘いにいったんだよ？『四天王になれ』って）・・・・・」

「え？・・・・何ていったんです？・・・・・あ、何でこんなに疲れてるのかは言いません。言えません。」

「えーー・・・・教えてくれても良いじゃん、そんくらい。」

むくれる先輩。口を尖らせている姿はなんかすごい可愛かった。・・・でもな。

「言えないものは言えないんですー・・・・・・っ！」

そんな事を話していると、急に体がグラッと傾いだ。・・・・・・・・

まずい！

方向感覚がつかめない。

「あ・・・・・・・・れ？・・・・・・・」

「「「ちょっ！ほんとに大丈夫！？」」」

おかしいな・・・・・・先輩の声が三方向から聞こえる・・・・・・

そして、突然視界がブラックアウトした。

『ドザザザザーー！』

足を踏み外し、派手に下まで転がっていった俺は何も言えずに意識を手放した・・・・

～燕ｓｉｄｅ～

私は授業を終え、川原を歩いていた。なんか面白いこと無いかなー・・・

「そういえば・・・零斗君・・・・今日も来てなかったな・・・・・・・」

私は三年からこの学園に来てるから詳しくは分からない、けど、ここ一週間零斗君の姿を見てない。・・・・不登校なのかな??

なんだかあの大戦から・・・・零斗君に色々と『興味』を持つようになった。

一つは・・・・

・・・・なんであんなに強かったのに・・・・・・・それこそ百代ちゃんに勝てるほどの実力を持ってるのに・・・・・・今の今まで名前すら聴いたことなかったんだろう・・・

二つ目は・・・

・・・あんな闘い方、見たこともなかった・・・・

格闘技とか武道ですらなさそうだった。

しかも・・・あの『気』・・・私を含め、あの場の全員が動けなかった・・・・・

・・・知りたい・・・・・・

三つ目は・・・

・・・・良く分からない・・・・なんだろう・・・・・・？？？

自分でもよく分かってない・・・・けど・・・なんか・・・・気になる・・・・？？？？

まあそういう訳。で、いつものようにのんびりと川原を歩く。と、

「ああ・・・・足が重い・・・・早く眠りたい・・・・『永眠り』でも良いから・・」

少し先を歩いていた人がそんな声を漏らした・・・・・どっかで聞いた・・・あ！！

「！！　あーー！零斗君だ！！おーい！！」

そう、ちょっと先を歩いていた人は零斗君だった。今日は来てたんだ・・・・

「どーしたんですかせんぱい・・・」

そんなことを言う零斗君に駆け寄ってみて・・・驚いた。

「いやさー！せっかくだから一緒に帰ろうと思って！・・・・・・ってうわ！
どしたのさ！目が死んでるよ！？」

・・・零斗君の顔は、今にも過労死しそうな顔だった。・・・・・
大丈夫！！？

「えっと、じ、じょうがあって・・・・・いっしゅう、かん、寝てないんです・・・・」

息も絶え絶えな感じで呟く零斗君。

足元もおぼつかない様子。

「なんでさ・・・・・・・でも！そんなときにはこの・・・・えと・・・・これ！」

話のネタ作りの為に商品の宣伝をする。

「・・・・・・・・・・・なん・・・・・すか・・・・それ？・・・・・・・納豆？？」

「ふふ～ん。よくぞ聞いてくれました！この『松永納豆』！食べればどんなに疲れてても
すぐに回復！『松永納豆』をどーぞ御贔屓に！！」

「まじですか」

「まじまじ。今の零斗君の死んだ目もあっという間に元通り！」

「やかましい。」

そんなたわいも無い会話をする。あ、あのことも聞いてみよ。

「で？何でそんなにぼろぼろなの？一週間ぐらい学校にも来てなか

ったよね？」

「！何で分かるんです？三年でしょ？」少し驚いた様子の零斗君。

・・・・・・・・・・むう～・・・・・・分かってないね・・・・・・

「（あの後毎日誘いにいったんだよ？『四天王になれ』って）」

・・・なんでいないの！

「え？・・・・何て言ったんです？・・・・・・あ、後

何でこんなに疲れてるのかは言いません。言えません。」

「えーー・・・・教えてくれても良いじゃん、そんくらい。」

「言えないものは言えないんですー・・・・・・っ！」

ねだっては見たが一向に零斗君は話してくれない。・・・・・・・・・

。

と、そのとき。

急に零斗君の体がグラッと傾いた。

・・・・・・・え？

「あ・・・・・・・・れ？・・・・・・」

徐々に零斗君の体が傾いて行く。

「ちょっ！ほんとに大丈夫！？」声をかけても全く反応しない。

『ドザザザザーー！』

そして、足を踏み外したのか、零斗君は

派手な音を立てて土手を転がり落ちていった。

「！！・・零斗君！零斗君っ！！」　必死に呼びかけるも零斗君は

動かない。

どうやら意識も無いみたい。

「ッ！大丈夫！？」　土手を駆け下り、零斗君の体を揺さぶる。

・・・・・息はあるみたい。そう思うとほっとした。

「ど、どーしよう・・・・そ、そうだ！　とりあえず家に帰って寝かせてあげよう！」

かなり焦っていた私は救急車を呼ぶという方法を全くもって思いつかなかった。

私は倒れている零斗君の体を起こし、

・・・・・・背負った。

背中に人の重みとぬくもりが伝わってくる。

「う・・・・・・／／／」

つい顔が赤くなってしまう。けど、今はそんなこと気にしてられない！

「・・・・・・・おりゃあああああああああ！！！」

私は全速力で、零斗君を背負い、自宅へと走った・・・・

第十一話「放課後」（後書き）

どうです？燕さんは既に零斗君のことがちょっと気になってるようですね・・・・可愛い・・・・

展開がわやいのは（も）見逃してね☆

既に燕さんは三年にいるという設定です・・・

次回は燕宅での話です。おたのしみに～。

第十二話「休養（燕宅～）」（前書き）

ども、今回は燕宅が舞台となっております。

相手の自宅に二人きりというのは書くとアブナイですが

・・・何も無いからね？・・・作者は純愛好きなのッ！

・・・ではどうぞ。

第十二話「休養（燕宅～）」

～燕ｓｉｄｅ、続き～

「・・・・・『バンッ！！』　ただいま！・・・って誰もいないから良いか！」

自宅のアパートに着き、ドアを開け放つ。今は一人暮らし中なので部屋には誰もいない。

「・・・よっと・・・・・」

零斗君の体をソファーに寝かせる。零斗君はまだ寝ているみたい。

「ふう・・・・・・ビックリしたよ・・・・いきなり倒れるんだもん・・・・」

そういって零斗君を見る。完全に疲れきっている様子だ。

「・・・零斗君・・・・・一体何してたの・・・・・？」
こんな疲れるまで・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・ん・・・・・・・」
零斗君が寝返りを打った。眠っている零斗君の顔をふと見てみる。

「・・・・・・・・・・・・・か、かわいい・・・・・・・・・／／／」

いつも大人びた表情だけど・・・眠ってる時は無邪気で、
ちょっと幼い笑みを浮かべていた・・・・・／／／
顔が熱い・・・・・

「／／／・・・・て、テレビ見よ！」
自分で恥ずかしくなってテレビをつけてみた。・・・・・・・と、

「紛争を続けていた中東国〇〇〇・〇〇と隣国である×××の
大規模な紛争は昨日の日本時間で午前三時二十分に停戦条約が結ば

れ、完全に沈黙
した模様です。この規模の紛争が一週間という短期間に終結する事例は
きわめて稀だということです。○○さん。今回の紛争、なぜこんなにも早くに終結
したのでしょう？」

「・・・はい、今回紛争を起こしたのは石油や鉱産資源の重要都市でして、
そこで戦争されると困るわけです。なので今回は各地で国連の大規模な
武力介入があったようです。」

「ありがとうございました。で、ですね、今回の紛争について、気になるＶＴＲが
あるんですね。では、どうぞ。」

そういい、画面はレポーター達が喋っている場面から戦地の映像に
切り替わった。

「（チラッ）・・・・・・・・っふふっ・・・・」

いつの間にかまた零斗君の笑顔を眺めていた私。
はっきり言って全く内容を聞いてなかった。

しかし、またテレビの画面を見たとき、私の視線は釘付けになった。
そこには・・・・・・

「『ズダダダッ！』えー、現在両国の国境付近で両軍、そして介入してきた国連軍の
激しい銃撃戦が繰り広げられています。・・・・あ！？今誰かがバリケードを超えて
戻ってきた模様です・・・・・・・・！！、少年です！日本人の少年が
避難民を連れて戻ってきました！！」

二つの盾と銃を持ち、一家族を連れて戻ってきた零斗君の姿が映っていた。

「え・・・・・・って！、なんで！？」

思わず叫んでしまう。！！？？

零斗君は誰か外国人の人と話している。
そして次の画面に映った。

「この市街地での銃撃戦は沈黙した模様です！・・・・・あ！！あなた！日本人ですね！ちょっといいですか！！」

「ちょっともよくない！」

・・・間違いなく零斗君の声だった。

「あなたは日本から派遣されたんですか！？」

「そーだよ！はいはい、もう撮んな！めんどくさい。あっち行けや！」

零斗君は取材を拒否った。しかし、レポーターの若い男も引かない。

「あなたはまだ子供のようですが！？」　と言うと、

「・・・・やかましい。『行け』と言っているんだ。」
零斗君の声が殺気のこもった声になった。

「！！・・・は、はいい！分かりました！失礼します！！」
たまらず逃げ出すレポーター。そこで映像は途切れ、スタジオに戻った。
何か解説者が喚いてたけど、全く耳に入ってこなかった。

「・・・・ええ・・・？まさか・・派遣・・零斗君・・・このため、だったの？・・・」

呆然とした声が出る。しか出ない。

・・・・ちょうど零斗君はそこにいるし・・・・詳しく聞いてみないと・・・・

と、その時・・・・

「ん・・・・・んん・・・・・・・・？」

零斗君の目がうっすらと開いた・・・・・

～零斗ｓｉｄｅ～

「ん・・・・・んん・・・・・・・・・？」

だんだんと視界が広くなっていく。

俺は・・・どーなったんだ？これ・・・？・・・・・

・・・・ああ、俗に言う「過労でぶっ倒れました」ってやつか？・・・・

・・・・・辿り付けなかったんですね・・・・・俺は・・・・・・・・・・ん？

・・・ここ家じゃん！・・・・・誰かの・・・・

「??・・・・・・あれ・・・・・・?どこだここ・・・・・」

辺りを見回すと、

「!!お、起きた・・・・・・?」

「なんと」

・・・・燕先輩だった・・・・・・・って!?

「ここ先輩の家ですか!?」　なして?

「う、うん・・・・・・・・・ダメだったかな・・・・・?」

何故かすまなさそうにする先輩。??

「いや、助けてくれたのはありがたいんですけど、なんで病院じゃなくて自宅??」

素朴な疑問を聞いてみる。と、

「あ・・・・・・・・・・・・・」

「え?」　今気づいたの!?

「しょ、しょーが無かったんだよ！あの時は！あ、いやその・・・・・」

「・・・・その？」

「・・・・・・・・・・忘れてました・・・・・・・・・その選択肢を・・・・・・」

『ドーン・・・・』と効果音つきで凹む先輩。どうやら本気で忘れてたらしい。

「まあ・・・その・・・・・何と言うか・・・・・ありがとうございました。」

「へ？」

「助けてくれて。あのままだったらたぶんのたれ死んでましたよ俺。」

体もだいぶ回復したし、今の俺は目にも生気が灯っていることだろう。

ありがたや・・・・・

感謝の意を込め、微笑んでお礼を言う。

「あ／／／い、いいんだってば！・・・・・・」
なぜそこで赤くなるんだ先輩・・・・

「・・・・・・・と、零斗君、一つ聞きたいんだけど。」
ん？急に先輩の目が真剣になった・・・・

「？・・・なんですか？」

「これ・・・・・・・」
そう言って先輩はテレビ画面を指差した・・・・そこには・・・・
インタビューされている俺の姿が・・・・・・・・

・・・・ガッツリ映っていた・・・・・・・・。

や　っ　ぱ　り　だ　っ　た　。

「これどうゆうことさ？ねえ。」

「う・・・・・（大汗）」　やばい・・・・っつか手遅れ・・・・

「・・・・・・・・分かりました・・・・ある程度は話しましょう・・・」

さて、どこまで誤魔化せるかな☆

こうして、俺はぽつりぽつりとギリギリなラインで『事情』を話すことにした・・・・

第十二話「休養（燕宅～）」（後書き）

はい・・・ちょっと調子に乗りすぎた感が否めません・・・

ってか燕先輩のキャラが大破してる・・・・気がする。

燕さんルート一筋で書きたくなってきたなあ～・・・

またアンケートとるかも♪ではでは。

第十三話「誤魔化し」（前書き）

ども、今回は零斗君の弁解です・・・

とはいえ誤魔化しですがね・・・・・・・・

・・・・さて！ついでに、ここでアンケートをまた取らせて頂きたく、

お題は・・・・・・・もう一部の人は分かっておられると思いますが、

・・・そうです！お題は、

「燕さん一人の純愛√にしても良いか」　です。

燕さん・・・・書きてええええ！！

期限は長めで、一言「どっちが良いか」を送ってください！！

間ってます！・・・再々アンケートですみません・・・・

第十三話「誤魔化し」

「・・・・・・・えとですね・・・・・・・・・まず・・・・」

・・・・・何から話せばいいんだろう・・・・・『自分殺し屋でした！テヘッ☆』

なんて絶対に言いたくねーし・・・・・

ギリギリなラインって言っても・・・全部アウトじゃね？

だらだらと冷や汗を流す俺。・・・えと・・・・・

「まず！あれは間違いなく俺です。」　「うん、知ってる。」

・・・・・ｏｒｚ・・・・・

「何であんなとこに行ってるのかは・・・・・・」

「かは～・・・・・・・・？？？」

うお、先輩の目が輝き始めた。好奇で。

「・・・・・・・・頼まれたからです。」

「誰に??」

「・・・・・・それなりな人に・・・・・・・・」

どうしよ、セーフな情報が何一つとして見つからねえぞ?・・・・・・

「まあ・・・要するに・・・・・・俺はあ〜・・・・・頼まれたことをする人だってことですよお〜」

・・・・・・・・・・歯切れ悪すぎるぞ俺・・・・・・

「それ結局答えになってないよ?・・・なんであんなとこにいたの?今までの欠席は全部ああゆうとこに行ってたの?」

「いや、それは無いです。」　きっぱりと言い切った。あんな経験はぶっちゃけ二度としたくない。

「じゃあ何してたの・・・・・？」

「・・・・・・・・・」
さて、どうしよう。まさか『人の頭ブチ抜いてました。』なんていえねーし・・・・

「ちょっと・・・・『仕事』をしてました・・・内容は言いませんが。」

「怪しい・・・・やましい仕事なのかな？・・・・・・」
ジト目で先輩が見つめてくる・・・・

「いいえ・・・・そんな事は・・・・・・」　ハイ、思いっきりやましいです！別方面で！
その視線に耐え切れずに目を逸らした。

「・・・ま、まあ、結局俺は今回とある団体に頼まれて、
人命救助（鎮圧☆）にいってた訳ですよ！」
これで信じてください・・・・・・・
俺がそう言うと、先輩はジト目のまま

「そんだけ？・・・・学校サボって彼女とイチャイチャしてたんじゃないの？？」
と呟いた。

『ズルッ！ガン！！』

「あだっ！！」

・・・・思いっきりずっこけてしまった。・・・疑ってたのはそっちですか！？

「なんで紛争からそっちに行くんですか！？」

「ん～・・・・私にもわかんないよ！（だって・・・何か・・・気になったんだもん）」
すがすがしく言い切る先輩。ああ・・・無駄な心配してた俺が馬鹿みてーだ・・・・

「でもさ、実際それだけなんだね？」先輩がなお追求してくる。

「はい。」

「ほんとに？」

「はい。」

「ほんとのほんとに？」

「はい。」

「ほんとのほんとの・・「だあ！ほんとですよ！！」」

ループしそうだったので断ち切っておいた。

すると、先輩はきゃははと笑い、

「うん。だったら良いや。安心したよ！」

満面の笑みを向けてきた。

「！！・・・・・・はい・・・・・安心してください・・・先輩『は』。
」

・・・・だめだ、この人に本当の事なんて言えねえ・・・・・・・
この人は絶対に『裏』に踏み入っちゃいけない人だ・・・・・・

俺は、先輩の安心しきった笑みを見て、罪悪感にちくりと心を刺された。

・・・・・・・・でも、いや、だって・・この笑顔は壊したくないもんなあ・・・・・・

そんなことを思っていると、

「うわ！もうこんな時間だ・・・・どうする？零斗君、ここで食べてく？」
先輩がさりげなく食事の誘いをしてきた。

「！！・・・いや、俺は帰ります。これ以上迷惑かけられませんし・・・・」

そういって玄関に向かう俺、と、

「零斗君！」先輩に呼び止められた。

「ん？なんですか？」

すると、微妙に頬を朱に染めた先輩はやわらかい微笑みを浮かべ、

「また明日。」と言ってきた。

！！・・・面食らってしまった。顔が赤く染まる。

「！！／／／・・・・・はい、じゃ、お邪魔しましたぁ！」

赤くなった顔を悟られないように、俺はさっさと玄関から退場した。

先輩はやっぱり笑顔が一番似合うな・・・・・・・／／／／／

零斗が出て行ったあと、燕は『ほう・・・』と溜息をついた、まだ顔が赤らんでいる。
そして、

「別に・・・・食べてってくれても良かったのに・・・・・・・」

不満げに口を尖らせてそう言った。　その呟きは無論誰にも聞こえない・・・・・・

～翌日～

「いや～・・・・フル出席は久しぶりだ～・・・・・♪♪」

俺は上機嫌な様子で学園へと向かう・・・最近学校が一番楽しく感じるなあ・・・・
そしてそのまま校門をくぐった。と、

『ザワザワザワ・・・・・・』　ん？なんか大量に視線を感じるんだが・・・・
と、前方に風間ファミリーの姿が・・・・こえかけよ。

「お～い。」

「「「「「！！！！！」」」」」

「え」

なんだ？どした？百恵先輩以外が固まったぞ？？

すると、島津・・・いや、ガクトと一子が急に近づき、肩を掴んでガクガク揺すり始めた。
風間ファミリーもこっちに来た。

「お前！！お前！！どうゆうことだよ！！」　「どうゆうこと！？零斗！」

「（（ガクガクガクガク））ちょ、・・・やめーい！！・・・あんだよ・・・・？」
と、

「昨日のニュース！何でお前が居たのかって聞いてんだよ！！」

「お、Ｏｈ・・・・・・・・・・」

そうだった。・・・・燕先輩に説明して完全に解決したつもりになってた・・・・

・・・・・・・全国ネットだったアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！

「やっちまったやっちまったやっちまったやっちまったやっちまったやっちまったやっちまったやっちまったやっちまったやっちまったやっちまったやっちまったやっちまったやっちまったやっちまったアアア！！！」

「零斗！落ち着いて！」　一子に言われ、錯乱状態から抜け出す。

「・・・・・・はい。あれは俺です。何か質問は？」　もう先手を打っておく。

「はい。」　「大和君、どうぞ。」

「零斗君は何故あんな所に行っていたのですかー？」

「頼まれたからです。誰にかは言いません。」

「はーい。」　「京さん、どうぞ。」

「一週間の無断欠席はこのせいですかー？」

「はい、そうです。」

「はいはーい！」　「一子さん、どうぞ。」

「一緒に話してた人は誰ですかー。」　「ガルシアさんです。」

「？？？」

「はーい。」　「はい、百代さん、どうぞ。」

「面白そうなので、後で私と一試合「お断りします。」・・・・・・・・・・（，・ω・、）」

また過労死したくは無い。

「はーい。」　「はい、・・・・・？？も○♪かくん、どうぞ。」

「覚えてないんかい！！師岡だってば！！」　「冗談ｗｗｗ。で？」

「なんだ・・・・。学園長がこっちに来てますが、どうするつもりですかー？」

「D☆A☆S☆H！！『ガシイ！』なにい！！？」

「そう焦るでない。話を聞かせてくれ。」

走って逃走を図ろうとした時には首根っこを押さえられていた・・・強ェ・・（汗）

「の？良かろう？」

「あは、あはははははっはっはっは！！・・・・タスケテーーーーーー！！」

助けを請うもファミリーの皆は完全に沈黙。はくじょーものー！！！

こうして俺はズルズルと個室に引きずられていったのだった・・・・・・・

第十三話「誤魔化し」（後書き）

はい、まだ続きます。

ところで、作者は『みてみん』にも登録しているんで、

挿絵を入れれるんですが・・・・・絵心が皆無なんです・・・・

（美術が１０段階で・・・・いえない☆）

どっか・・・イラストの描き方を初歩の初歩から教えてくれるサイトないですか？？？・・・ぜひぜひ教えてください！

アンケートもよろしく！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6703x/

まじこい！～『闇殺し』の少年の物語～

2011年11月9日03時10分発行